

ありのまま

～しあわせな不登校のすごしかた～



発行：NPO 法人自由創造うぽたんぽぽ
代表 米澤美法

冊子目次

- 自分を大切に生きていこう<米澤美法>…………… p3
- 冊子発行に寄せて<星野実>…………… p5

自分らしく生きるって？

- あなたはあなたのままでいい<前川喜平>…………… p10
- この世に生まれた一人ひとりのありのままが素晴らしい！
 <細川佳代子>…………… p11
- 白いご飯を食べられなくても生きていける！
 <田中洋輔>…………… p13

不登校が辛いなら…

- 登校できなくて困っているキミへ<高祖常子>…………… p17
- 不登校のお子さんを抱えて困っているママパパへ
 <高祖常子>…………… p18
- 不登校は神様からの贈り物に違いない<小瀧弘美>…………… p19
- 大人も子どもも、「そのまま」「ありのまま」の
 存在価値が認められる社会に<木村ゆき>…………… p23

個性を生かした学び方

- ホームスクールという選択肢があることの素晴らしさ
 <ベンソン（進士）万里子>…………… p28
- 私が「おはなしワクチン」を始めた理由
 <蓑田雅之>…………… p36
- 自然と家庭を学び舎にして<戸高優美>…………… p39
- フィンランドから見る日本の学校教育<建石尚子>…………… p42
- No! と言える君たちへ<谷本たまき>…………… p45



教育の現場から

- 応援メッセージ<竹内薫>…………… p48
- クリエイティブ・キャリアデザインのすすめ
 <神崎史彦>…………… p51
- 未来から考える教育～親が自分を愛することから
 はじまる子どもの成功哲学～<川本潤>…………… p54
- 光を当てる角度を変えれば必ず輝く場所がある
 <上木原孝伸>…………… p58
- 良き出逢い<金原崇人>…………… p64
- 不登校についての論考<佐瀬順一>…………… p68

高校生からみた日本の教育

- 学校を飛び出した社会へ<小林大真>…………… p72
- もったいない教育！<畠山秀哉>…………… p74

ちょっとフレイク「教育機会確保法」…………… p76

子育てって、教育ってなんだろう

- 「今」をいきいきと生きる<伊藤史織>…………… p78
- 父親のつながる力と多様な生き方・学び方
 <下村健士>…………… p82
- 思い通りにならないのが子育て。
 だからこそ、愛するということ<西野奈津子>… p84
- どんな選択も「自己表現」の一つ
 <阿部あゆみ>…………… p84

不登校・多様な学びの経験から

- 歩く花<吉田晃子・星山海琳>…………… p92
- 不登校が学びを進化させる<加藤佳子>…………… p94
- “ふつう”<田中富代>…………… p96
- 「不登校」と呼ばれる子どもは誰もいない
 <木村泰子>…………… p99

INFORMATION … 教育や不登校などについて学べる
情報サイトのご案内です。

「学校が楽しければいいけれど、そうでなければ
他に楽しめる場所があればいい」

これは、私が運営しているラボのスタッフが考えてくれた言葉です。

学校は、多くの子どもにとっては楽しい場所ですが、そうでないと感じる子どももいます。万人にフィットする天国のような場所なんてそうはないのですから、学校が苦手な子がいてあたりまえなのです。

けれど、学校が合わずに行かなくなると、たいていの場合はまわりから問題視されてしまうのです。

そうすると、自己肯定感は下がり、人生が辛く感じてしまいます。それって、もったいないと私は思うのです。

2017年2月に、「教育機会確保法」が施行されました。

この法律では、学校を休んでよいこと、学校以外の場所の重要性、ひとりひとりに合った支援をすることなどが定められています。

不登校は、一つの人生の選択肢なのです。問題視してしまう大人側のほうが、問題なのです。

個性は人それぞれ。

学び方も覚え方も好みも得意なことも違って当たり前です。「みんな一緒」に同じ速度で同じように学ぶことだけがすべてではありません。違いがあるからいろいろな世界を知ることができるのに、その違いを認めてもらえなかったら、せっかく生

まれ持った個性がもったいない。もっと自分らしくいられる場所、幸せに生きる権利が、わたしたちにはあるのです。

学校にも、学校以外の場所にも、世界は無限に広がっている。

飛び出すのも 飛び込むのも 自分次第。

そんなことを多くの人に伝えたくてこの冊子を発行しました。

少しでも多くの人に読んでいただきたいから、無料配布をすると決めました。各方面で活躍されている皆様からご賛同を得て、たくさんご寄稿をいただきました。そして発行のための資金も、多くの方のご支援で集まりました。そんな皆様からの温かい心があられるくらいぎっしり詰まったメッセージ集になりました。

我が家という豊かで温かい土で、子どもたちの根っこをしっかりと伸ばして、大きく大きく成長させてあげてください。すべての経験が、私たちを大きな太い幹の木に育ててくれます。不登校の経験も、いつか立派な枝を茂らせます。

どうかこの自分と向き合う大切な大切な時間を、信じて待っていてください。



米澤 美法 プロフィール

NPO 法人自由創造うぼたんぽぽ代表理事
子育て支援員・子育てこころサポーター。

学生時代から現在に至るまで総合的に保育、心理学、傾聴を学ぶ。子ども時代の海外での生活、成人してからの海外での仕事の経験から、日本と海外の視点の違いも含めて日本で窮屈さを感じる子どもたちが自分らしく生きられる環境づくりを目指し、日々活動している。

アメブロ・ホームページは「自由創造うぼたんぽぽ」で検索！

「自由創造うぼたんぽぽ」冊子発行に寄せて

星野 実

『引きこもりの国』（マイケル・ジューレンジガー 光文社）という本があります。

日本に長く滞在していた国際的なジャーナリストが、入念で実証的な取材を繰り返すうちに、「日本の100万人の若者を自閉させるこの国の悲劇」として、このような本をまとめています。

また、国連の「子どもの権利審査委員会」の世界の知識人たちが、3週間にわたって日本の教育をていねいに分析して、集中審議して、「不登校の数の多さを懸念」し、「権利と自立よりもはるかに従順さと義務に力点をおいている」「創造性よりも協調性を求めている」とその弱点を、日本政府に勧告しても、それを全く直そうとしないのが今の日本の現状です。

ですから、不登校の数は増え続けています。今日のこのような教育状況のなかで、「苦しい」という声を出してもいいのです。この教育状況に適應している方が、むしろ問題なのかもしれないという視点も大切です。ですから、「親の子育てが変わる」「しつけができていないからだ」「子どもを甘やかしたから」などと、不登校の原因を、保護者特に母親の子育てに求めるのは間違っていると、声を大にして言いたいです。

私は東京の町田市の私立和光中学校の現場教師として、20年以上「不登校」の生徒とかかわってきました。

私は、不登校や社会的なひきこもりは、その人の人生の、その人の人間としての成熟過程におけるひとつの「つまずき」だととらえています。人間はそうしたつまずきに遭遇することで悩み、その悩みを通して、自分という人間にあらためて向き合い、自分で自分と問答して、自分の生きるべき道を、ゆっくりでもいいから、うろうろしながらも見つけ出していく。そういう過程そのものが、人間としての成熟への道程だととらえています。

私が不登校で、特に大切にしている二つの視点があります。

第1は、子どもが自分で自分をなおすということ。こうした状態から立ち直り、みずからを解放していく主体は子どもや若者自身だということ忘れてはいけないと思っています。その子の周囲の親、教師、カウンセラーなどの援助者はそれを手伝う「脇役」でしかないのです。その援助の仕事は、壊れたテレビを直すような仕事ではありません。テレビを直す仕事では、直す主体は人間であり、テレビは直される受け身の客体ですが、不登校や引きこもりの場合は、「直す」主体はその当人自身であることを忘れてはいけません。この視点を忘れた押しつけがましい、一方的な、あれやれ、これやれの「援助」が、実はとても子どもや若者を追い込んでいるということがあるのです。

第2に、苦しんでいる母親を支え、みんなでサポートすることです。不登校の子どもを救うためには、まずそれを支えている

お母さんを救い守ることが大切です。「行かないのではなく、行けないんだ」といったと一緒にその現実を受け止めること、親が肩の力を抜くことで親がうんと楽になります。そして、親が楽になると実は子どもも楽になっていきます。親がデーンとしてないで、バタバタしていると、子どもは自分で自分を立ち上げていく自分の仕事にとりかかれないのです。心の中の痛みや怒りなどのマイナス感情を出してはいけないと抑え込むことはかえってマイナスだと思います。無害なかたちの「言葉」で吐き出すことがとっても大切です。「話す」という行為は、怒りや苦しみ等の感情を自分の心のなかから「離す」「放す」ことでもあるのです。

私の考える不登校の大切な二つの視点を支えてくれるのが、「自由創造ロボたんぽぽ」の活動です。

私と関わってきた不登校だった生徒も、その母親、父親、家族も、立ち直っていく過程では、みんなまわりの仲間や集団に支えられていました。多くの不登校の生徒の「つまずき」が、現代社会から生み出されてくる「冷たい」人間関係であることが多いのですが、立ち直っていく過程においては、現代社会とは違う視点でサポートしてくれる「あたたかな集団」の中に身をおいて、じっくりとゆっくりと癒されていくことが大切だと思います。

不登校の生徒が、自分を「ダメな奴」「情けない奴」と丸ごと自分を責める自己否定にならないように、自己否定のスパイラルに陥らないように、「自分が自分であっていいんだ、大丈夫なんだ」という自己肯定感を自分で少しずつ感じていけるように、彼らの内面に「安心基地」をつくっていくのをサポートしてくれるのが、「自由創造ラボたんぽぽ」の活動なのです。

不登校の親も、周りや外野が何と言おうと「この子はこの子でいいんだ！」「私は私でいいんだ！」と思えるようになる、「子どもと言っても別の人格」「この子はこの子の人生を歩んだ」親の人生とは別なんだと思えるようになっていくのをサポートしてくれるのが、「自由創造ラボたんぽぽ」なのです。

私は「自由創造ラボたんぽぽ」を応援しています。



星野 実 氏 プロフィール

私立和光学園・和光中学校教諭（募集対策委員長）

学校論、子育て論、クラブ活動論など、全国で講演活動も行っている。

体育教師としても「バスケットボール」や「水泳」等の理論講座や実技指導を全国で行っている。

自分らしく生きるって？



「あなたはあなたのままでいい」

前川喜平

あなたはあなたのままでいい。

今日のあなたは、きのうのあなたとは違う、新しいあなた。

あしたのあなたは、今日のあなたとは違う、
さらに新しいあなた。

好きな本を読んで楽しかったら その分、

テレビで知らない動物のことを知ったら その分、

誰かから話を聞いて「へえ〜」と思うことがあったら その
分、

あなたは気づかないうちに

たしかに賢くなっているんです。

大人になるために必要なことは、いろんなところで学べます。

図書館でも、テレビでも、ネットでも、
家族からも、家族ではない大人からも。

ゆっくり、自分のペースで、
学びたいところで、学んでいけばいいんです。
あなたが学びたいように学んでいけばいいんです。



前川 喜平氏 プロフィール

元文部科学省事務次官。教育機会確保法の成立に尽力。多様な学びの必要性を説き、全国各地で学習支援ボランティアや夜間中学スタッフ、講演活動を行っている。

「この世に生まれた一人ひとりのありのままが 素晴らしい！」

細川佳代子

知的障がいのある方たちと関わり、スペシャルオリンピックスを日本中に広めた私が、心の底から実感していることです。

それぞれの個性や特性を理解し、認め合う気持ちを持って、必要となるところに手を差し伸べれば、誰もがいきいきと輝いて暮らすことができます。

「学びの場」も同じではないかと思うのです。

従来の画一的な「学校」には馴染むことが難しい子もいるでしょう。学校とは違う環境で学ぶことで、可能性が大きく広がることもあるかもしれません。それぞれの得意な部分を伸ばすことで、社会で活躍する才能が開花することもあると思います。

学びの場が一番教えなくてはいけないことは、自尊の心や生きていく「力」を育むことだと考えます。世の中には実に多様な人がいることを知り、いろいろな「学び」が必要とされ、それらを自由に選択できることは、これからの日本社会に求められる、とても大切な考え方ではないでしょうか。

フリースクールやホームスクーリングなどについて、社会の認識も変わっていくことが迫られている時期にあると思います。

それぞれに合った「学び」がもっともっと広く認められ、誰にとっても明るい未来が見える社会こそ、私が目指している

「インクルージョン社会」です。

一人でも多くの方が、その必要性にご理解を示して、協力者となってくださることを心から期待しております。



細川 佳代子氏 プロフィール

NPO法人勇気の翼インクルージョン理事長
公益財団法人スペシャルオリンピックス日本
名誉会長
NPO法人日本フロアホッケー連盟理事長

ボランティア活動に積極的に取り組み、約25年前、知的障がいのある人たちの自立と社会参加を日常的なスポーツを通して実現するため、「スペシャルオリンピックス日本」を設立。

その後、スペシャルオリンピックス独自の競技だったフロアホッケーを、すべての人が共に楽しむ「ユニバーサルスポーツ」として広く普及させる。

現在も、「勇気の翼インクルージョン」の理事長として、障がいの有無などに関わらず、すべての人たちがその人らしく生き生きと暮らせる“インクルージョン（包み込む共生社会）の実現”を目指し、活動を続ける。

知的障がいのある青年たちを追ったドキュメンタリー映画4作を製作・総指揮。現在5作目の映画に取り組む。

「白いご飯を食べられなくても行きていける！」

田中 洋輔

炎鵬という力士がいる。

身長は、170cmに満たず、体重は関取70人の中で一番軽い。それにも関わらず、史上最速で十両に昇進する異例の大出世を果たした。

僕は、炎鵬関と不登校を重ねてしまう。

彼が不登校だったわけじゃない。彼のプロフィールを知ったときに、思ったのだ。

「不登校の子どもと同じじゃないか」と。

炎鵬関は、白米が食べられない。白ご飯が嫌いなのだ。日本人で、なおかつ、相撲取り。誰もが、白米をがぶがぶ食べる姿を想像するだろう。

しかし、炎鵬関は違う。米が嫌いなのだ。

僕は、「学校」は白米と同じだと、思う。

みんな行って当たり前。みんな食べて当たり前。

学校の先生をはじめ、保護者も近所の人たちも親戚もみんな学校には、楽しい思い出がある。

学校で友達ができた。学校で勉強を学んだ。学校でコミュニケーションを学んだ。

学校へ行くことが当たり前で、学校へ行かないという選択肢をそもそも知らない。

あなたは、白米が嫌いな日本人を知っているだろうか？

ほとんどの日本人は、ご飯が大好きで、白米を食べて生きてきた。だから、「白米が嫌い」という人の気持ちは、全く理解ができないに違いない。もし、子どもが「白米が嫌い」と言えば、どうするか？ きっと、必死で説得するはずだ。なんとかして、ご飯の美味しさを伝えようとするだろう。

「きっとこの子は、白米の美味しさをまだ知らないだけ」だと思ひ、いろんな食べ方を教え、たくさんの美味しい米を食べさせる。

不登校も同じだ。学校に楽しい思い出がたくさんある大人たちは、なんとかして学校の良さを伝えようとする。なんとかして、学校へ行かせるようにする。

ご飯に明太子をかけたら食べられるんじゃないかと画策するように、別室登校を勧めたり、放課後だけ来ても良いよと促すこともある。

しかし、僕は思うのだ。

別に白米が食べられなくてもいいじゃないか、と。

炎鵬関は、餅やうどんを食べている。栄養で考えると、炭水化物が取れば、別に白ご飯でなくてもいいのだ。パスタでもいいし、ラーメンでもいい。白ご飯に固執する必要は、全くない。

大人は、「白ご飯を食べない」という選択肢を知らないから、なんとか食べさせようと思うけれど、本人からしたら、余計なお世話だ。たくさんの食べ物がある現代において、無理に食べる必要なんて一切ない。

学校へ行けないなら、違う選択肢を選べば良いのだ。

フリースクール、ホームエデュケーションなど、いろんな方法がある。炭水化物が白米だけでないように、学びの場は学校だけではない。無理して食べるよりも、好きな食べ物を食べたほうが成長するのは明らかだ。

炎鵬関は、白ご飯が嫌いでも、相撲で結果を出している。学校へ行かないからそこで将来が終わるなんてことは無い。

世界は、可能性で満ちていて、どんなことでもできる。

いや、むしろ学校という場所に縛られないほうが、たくさんの可能性を伸ばしてくれるのではないかとさえ思う。

学校へ行けないことは問題じゃない。白ご飯が嫌いな人がいるように、学校という場所が嫌いな子もいる。学校が苦手な子がいる。

無理して学校へ行く必要なんてない。

なにを食べても良いように、どこで学んでもいい。

不登校の子どもこそ、可能性で満ちている。



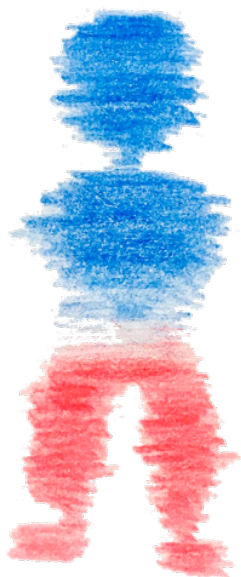
田中洋輔氏 プロフィール

NPO 法人 D.Live 代表理事

1984 年 大阪生まれ 立命館大学文学部卒

プロ野球選手を目指すも、強豪校へ入り挫折し不登校に。大学に進学するも、引きこもりになる。周りの支援で復活。「自分のようにしんどい思いを子どもたちにさせたくない」と思い、2009年、学生時代にD.Liveを立ち上げる。滋賀県を中心に、フリースクールや自信を取り戻す教室を運営。不登校のときの話しや自尊感情（自己肯定感）に関する講演や研修をおこなう。夢は、「能力や環境に関係なく、全ての子どもが自分の未来に期待出来る社会をつくる」こと。学生時代は、お笑い芸人として漫才をしていた過去をもつ。

不登校が辛いなら・・・



「登校できなくて困っているキミへ」

高祖常子

登校できないキミ。

でもきっとキミは、心や体を守るために「学校に行かない」という決断をしたんだと思う。自分で決められたんだから、それはすごいこと。

学校にいられない自分を責めたりしないでね。

学ぶことはどんな方法でもできるよ。学校だけじゃない。

もし心と体が落ち着いたなら、自分なりに学ぶ方法を見つけて欲しいと思う。「勉強なんて社会の役に立たない」と思っているかもしれない。

もちろん、ひとつひとつの勉強がすべて社会に出るときの役に立つとも思わない。でも、学んでみることに、そのやってみることが大切だと思う。

興味があることなんでもいい。

とりあえず1つの科目でもいい、教科書や参考書を使わなくてもいい。きっといろんな学び方があると思う。

「面白い」「もっと知りたい」って気持ちがほんの少しでも沸いてきたら、きっとちょっぴりキミの心が元気になった証拠。あせらなくていいから、見つけて欲しい。

「不登校のお子さんを抱えて困っているママパパへ」

高祖常子

たぶんたくさん悩んで、たくさん苦しんで、たくさんの相談先にあたった方も多いと思います。自分の苦しさはいざしらず、子どもが苦しんでいる横にいるのは、とても辛いですね。でも、「横にいる」ことがお子さんの力になっていると私は思います。横にいてくれる、横にいてくれた……ということ自体、子どもにとっても、親自身にとってもほんのちっぽけなことかもしれないけれど、多分きつと、心の一番大事なところに刻み込まれているのだと思います。

子どもとも話した、先生や学校ともいろいろ交渉した、そのほかいろいろ……。できる限りを尽くしたのなら、あとは少しだけ規則正しい毎日を、日常を積み重ねてみていただけたらと思います。そして、家事の何か一つでもいいので、お子さんに役割を与えてみてください。自己有用感、自分が役立っている感覚が、少しずつお子さんに小さな自信を増やしてくれると思います。

そして、パパママ自身が、元気に生きること。楽しそうな大人でいること。子どもとの会話を楽しむこと。毎日じゃなくても、そんな姿を見せることが、きっとお子さんの心にも明かりをとすのではと思っています。



高祖常子氏 プロフィール

育児情報誌 miku 編集長／子育てアドバイザー
NPO 法人児童虐待防止全国ネットワーク理事、
NPO 法人ファザーリング・ジャパン理事、NPO
法人タイガーマスク基金理事ほか。育児誌を中心に編集・執筆を続けながら、子ども虐待防止と、家族の笑顔を増やすための講演活動、ボランティア活動も行う。著書に『感情的にならない子育て』

（かんき出版）、編著は『ママの仕事復帰のために パパも会社も知っておきたい46のアイデア』（労働調査会）、『パパ1年生』（かんき出版）、『新しいパパの教科書』（学研）ほか。3児の母。

「不登校は神様からの贈り物に違いない」

小瀧弘美

こんなことを言うと、カウンセリングに見えたお母様にはぎょっとした顔をされます。まあ、確かに子どもが学校に行かないことに悩んで、悩んだ末に私のところに来たのだから無理もない話なのですが。

「先生、どうして贈り物なんですか。もう、大不幸ですよ。将来真っ暗です。もう高校だって行けないかもしれません。そしたら、もう社会に出ても不幸しかありません」そう涙ながらに訴えられたこともあります。

これってどう思われますか。「そうそう、その通り、不幸ですよ」って言う方は、お子さんが不登校になったばかりか、不登校の情報が少なかったり、届いていない方に多いように思います。

「不登校」になるってどういうことでしょうか。

不登校は学校に行かなくなることです。もしくは行けなくなることです。

行かなくなると行けなくなるは、同じような言葉ですが子どもたちに言わせるとこの二つは大きく意味が違うそうです。この微妙な感覚を共感できないと子どもたちと話しても本音を聞くことは難しいかもしれません。（これがわかって本音を話してくれるまでには長い時間がかかりますし、話してくれないことも多いですが）

不登校になる子どもたちの多くは真面目で優しい子が少なくありません。他人への気配りが出来る、いえ出来過ぎるために、

自分自身が疲弊してしまうような子どもたちによく出会います。こういった子どもたちは、自分が辛くなるギリギリ、もしくはもう駄目というまでは学校へ行き続けます。

頑張り過ぎた子どもたちは、心がすっかり疲弊して、身体も疲れ切って学校へ行けなくなります。こうなって初めて保護者が気づく場合も少なくありません。中には、疲弊しても、親にも、誰にも話さなくて、自ら命を断ってしまう場合も実際に起こっています。

ですから「不登校は神様からの贈り物」だと思うのです。

学校に行けなくなったと打ち明けて貰えたら「ああ、死ななくて良かった」と思っていたほしいのです。

うちの子に限って、と思うかもしれませんが、この境目は50：50だということを覚えておいて欲しいです。子どもの心は揺れ動いていて、どちらに傾くのかは本当に危ういのです。

学校に行かないという場合も必ず理由があります。親は学校へ行かないと言われてもすぐには受け入れられず「なぜ」と問い詰めてしまいがちですし、怒ったり、なだめたりいろいろ手を下しますが、まずはそのままの子ども気持ちを受け止めて欲しいと思います。「学校に行かない理由はわからないけれど、行かないのには理由があるんだろう、わかったよ」と親に言ってもらえたら、どれだけほっと出来るでしょう。

学校に行かないと言ったのに、無理やり行かせる、子どもは真面目だから我慢しながら行く、ということが続けると心がだんだん辛くなって次は身体にも影響が出てきます。そして「行けない状態」になってしまいます。

だからね、不登校は神様が子どもたちの命を守るためにくださった贈り物だなと思います。学校に行かなければ、子どもは安心して疲れた心と身体を休めることが出来るのです。

「そんなこと言っても先生、進路はどうすれば」って声が聞こえてきますね。

この進路という言葉が親にとっての大問題なのですね。

進路とは、高校へ行って大学へ行って就職するというルートだけでしょいか。きっと、このルートしかないと思っているから悩むのだと思います。高校も全日制でなければという神話みたいなものに縛られているのかもしれませんが。今は、高校だっていろいろな種類の学校があります。大学への道も一本だけではありませんし、大学へ行くことだけが幸せへの道ではないと思います。（この辺の多様な進路については別の方が書いていると思うので割愛しますね。）

子どもたちは、親が思っているより、ずっとしっかりして自分の未来を考えているものです。不登校で学校へ行かなければ考える時間はたっぷりあります。神様はじっくり考える時間もプレゼントしてくれたのかもしれませんがよ。（普通に学校に行っていれば機械的に勉強を詰め込まれ偏差値で振り分けられ考える時間もなかったはず）

親はジタバタしてあーでもないこーでもないと子どもに刺々しい言葉は投げつけず、どしどしと構えて待ってみませんか。安心して居られる場所があれば子どもは自分自身で立ち上がり歩いていくのだと思います。その過程で子どもたちから助けを求められる日が来ますから、その時にはさっと手を出してやれる

親でいれば最高だと思います。

みんなと違う道を選んだ子どもたちは、大きな可能性、キラキラした宝物のような未来を持っているのではないかなと不登校の子どもたちと話すたびに私は感じていて、そんな子どもたちをスペシャルタレント気質の子どもと呼んで密かに尊敬しています。特別に神様が贈り物をくれた大切な子どもたちだと思うと学校へ行かないことも前向きに受け止められるのではないかと思います。



小瀧弘美氏 プロフィール

コミュニケーションセラピスト、家族支援カウンセラー（一般社団法人 家族支援メンタルサポート協会認定）

公式サイト： <http://hiromikotaki.com>

FB: <http://www.facebook.com/hiromi.kotaki.9>

個人カウンセリング、ストレスマネジメント講座、「私の取扱説明書」ワークショップ、講演など、多岐にわたり活動している。

【無料診断】あなたはスペシャルタレント気質かも

スペシャルタレント気質判定☆ワンポイントアドバイス付き→メールによる有料判定を行っています。

【外部との活動】

- お母さんのためのプチ・ストレスマネジメント講座開催
- 9月1日子供たちを自殺させないキャンペーンに参加（2016年）
早稲田大学の学生たちの任意団体「十人十輝（じゅうにんといろ）」より招致され Youtube 動画、情報発信を行う。（じゅうにんといろチャンネル）

不登校/起立性障害【チーム元不登校学生】”起立性障害の子を朝起こす事は、骨折者を走らせる事と同じ”

<https://www.youtube.com/watch?v=o8k2YZvNlq0>

親の本音と子の本音”【引きこもり生放送】初回一般公開

<https://www.youtube.com/watch?v=5dntrv8xQZ8>

大人も子どもも、「そのまま」「ありのまま」の存在価値が認められる社会に

木村ゆき

だいぶ、社会も変わり始めてきていますが、世の中の大部分の子どもは学校へいっており、それは「普通」とされていると思います。

学校へ行けない、集団が苦手、教室にいられない。理由は様々だけど、「不登校」という名前を付けられて、罪悪感や疎外感、自己否定に悩んでいる子どもたちや、育て方・かかわり方、将来に悩む親御さんが全国にいます。

私自身も子どもが学校に行かなくなって「支援ではない不登校対応」を求めて、情報を探し、居場所を探し、そのなかで「普通」や「学び」「自由」についての考えがクリアになってきました。

不登校、という言葉や、学校へ行けない、といった表現に違和感を感じ、面倒くさいくらいに「学校へ行かない、行っていない」と、否定の（～できない）という外からの評価を含まない表現をわざわざするようにしていました。

子どもとのやりとりや居場所作りのなかで感じてきたのは、不登校はマイナスイメージで捉えてしまいがちですが、裏を返せば、身体感覚で「嫌」と感じる才能があり、その感覚に真摯に向き合っている結果だということ。人間が生きていくなかで危機感というものは大事で、それに敏感なことは悪いことじゃなく、体や心が壊れてしまう前にNOと発信できた生きることにまっすぐな子どもたちだということです。

徐々に変わってきてはいますが、まだまだ不登校は支援するもの、学校に<来れない>子どもは助けるもの、弱いもの、そんな対応がメインです。そして、原因を探すことに時間を掛けていることが多いです。その間、成長期の子どもの大事な日々は自己肯定感を持てずに過ぎてしまう。たくさんのことを吸収できる大事な毎日を、罪悪感や自己否定感のなかで過ごさせてしまうのはもったいない。そう感じ、とにかくそれぞれの子が「今のありのまま」いられる場所として自分の周りの子ども達だけでも、と不登校・ホームスクーラーの居場所を作りました。学校だけ、家だけが世界じゃない、いろんな価値観や選択肢につながる、それを捉え直すきっかけとなる「どこでもドア」みたいな居場所になればという思いで。自分の描いた場所が、未来がドアを開けたら続いている。その一歩手前の力を取り戻す、自分らしさを取り戻すための秘密基地、そういったイメージで居場所を作りました。

マンガ読みたかったら読めばいいし、話したくなかったらただ来るだけでいい。外出のきっかけ、そのためだけに利用してくれればいい。学校へ行けないからダメとか、勉強ができないからダメとか判断しない、何か取り繕って来る必要はない場所。

確かに学ぶことさえ大変な国もあります。

だから、「学ぶ環境さえない国だってあるのだから、不登校なんて甘えてないで頑張りなさい。」というようなこともよく言われてしまう。でも、だから我慢をしなければならないのではなく、この日本で、選択できることが許されている国で、大事な毎日を苦しんで過ごすことだけはあってはいけないと思うのです。

休む時間、立ち止まる時間、そういうものは必要です。ただ、親も子も「社会の目」という実態のないものに時間を止められて、自分を苦しめて過ごすほどに毎日は軽いものでしょうか。学校に行くのが苦しいなら、心身が壊れる前ににげて自分を守れること、それはひとつのスキルです。少なくとも非難されるべきことではないはず。

自活しないでいられることが許されている子どもの間、ひきこもって自分を見つめる時間を持てるならその環境を大事にすればいいのだと思います。

今できることを、あなたのペースで。人は意外と追い詰められたら、ちゃんとやるものです。悩んでいいとき、休んでいいときはそうしたらいい。そして、その環境に自己否定や罪悪感を感じなくていい。地球上何十億もいる人間のなかでは、上には上が、下には下がいて、だれと比べたって自分がダメなところも秀でているところも両方ある。

〇〇できない、もあなたを形作る一つの個性であり、隣の人と全く同じなら人間ではなくてAIでいい。

できないは、やりたい、を生むし、何も悪いことばかりじゃない。できないことから見えてくる経験、発見、それを体験できるのはいろんなことを吸収するチャンス。マイナスなことも、プラスなことも違いがあるから、あなたという一人に価値があり、それは大人も子どもも国も関係なく同等の価値。

人と違うマイノリティは、アドバンテージに。違いは裏を返せば強み。

引きこもっている時間は根をしっかりと張っている時間。土の上しか見れない人には何もしていないように見えるかもしれないけれど、根がしっかりと張っている方が花が咲いたときに倒れにくい。

そして、学校へいかなければ将来がない、かどろかは自分次第。学校以外での様々な経験、感じたことは、自分の器を大きくする。いろんな感情、体験、織り交ぜて、自分オリジナルの個性を作っていく時代です。

この体験もあの体験も、あなた自身、自分自身の色になる。

学びを選べる環境にいることに感謝しながら、毎日を大切にすること。それだけで十分頑張っているってことです。

世界には学べない環境の国もある。日本にいる私たちは、選べる国に生まれたことを活かして、時には学校も活用しながら、自分が学びやすいところ・かたちで学べばいいと思います。

「学び」は、いつか誰かのために何かしたいときの力になるから。



木村ゆき 氏 プロフィール

不登校&ホームスクールの居場所 Open Base 運営☆ 翻訳/日本語レッスン

ホームスクールサポート「えいご de 塾」運営

個性を生かした学び方



ホームスクールという選択肢があることの素晴らしさ

カナダ在住 ベンソン（進士）万里子

2年前、引っ越しをきっかけに、子どもが転校した。

どちらも公立小学校ではあったが、転校先で突然、長男ノアにふざけ癖がでてきた。新しい学校に慣れたら元に戻るかとの期待もむなしく、ふざけ癖は悪くなるばかり。なぜふざけるのかときくと、「退屈だから」という返事。…

思い返せば、引っ越し前、ソルトスプリング島でのクラスは最高だった。

当時はそのプログラムがここブリティッシュコロンビア州の中でも先進事例であったことは知らなかった。

詳細は避けるが、略称 MYSEEC (Middle Years Shared Ecological Educational Centre) と呼ばれる、日本でいう幼稚園から小学校 3-5 年生までを対象にしたプログラムで、自然豊かなソルトスプリング島のロケーションを生かし、自然や（人間を含む）生態系に焦点を当てた、経験重視のプロジェクトベース教育だ。もちろん、ブリティッシュコロンビア州（以下、BC 州と呼ぶ）の教育方針とも呼応させた、アカデミック（いわゆる読み書きなどの基礎学力）な要素も、現場主義の自然学習の中に盛り込まれたもの。

はじめてノアのクラスをのぞきに行ったときの驚きは、今も忘れることができない。

うるさく騒いでいた子どもたちを前に、若い担任の先生は、自分を母鷲（お母さんワシ）と例えて、マザーイーグルが羽を広げたらすぐに彼女の前に集まるようにささやいた。彼女が腕を広げた途

端、魔法のように静かになった子どもたちは、マザーイーグルを囲んで座り、様々な物語りに聞き入る。子どもたちはほとんど毎日、雨の日であっても、一定以上の時間を、学校を囲む森の中で過ごす。

ある日、ノアに学校で何を学んだかときくと、” archaeology（考古学） ” と答えた。考古学の言葉や定義だけでなく、実際に森にある植物を目前に五感を使いながら、考古学者の体験談や歴史、役割なども理解しているようだった。

今までの私だったら、「まだ幼稚園なんだから、考古学なんて、難しすぎない？」と反応していたに違いない。

「考古学の定義よりも、易しいABCの読み書きから始めた方がいいのでは？」

でも、ノアの生き生きとした反応や話し方を見るうちに、それこそが、私たち大人たちが勝手につくってきた、「子どもたちはこう学ぶべき」という既成概念にとらわれたものであることに気づいた。

ソルトスプリング島からペンダー島に引っ越して、ペンダー島の学校はとてもいいという評判をきいていただけに、ノアが学校に満足せず、退屈しているのを知り、残念な気持ちになった。

引っ越し後、初めての三者面談の日、夫と私は、担任の先生にソルトスプリングでのエコロジカルクラスの経験を話した（追記：当時ペンダー学校では、4年生以上のみにエコロジカルクラスの選択肢があったが、現在、3年生以下を対象にしたエコロジカルプログラムの仮導入もされ、進化中）。

しかし、両者が共通の視点をもつことには至らなかった。逆に、担任教諭によると、ノアは転校時、クラスの中で読み書きレベルが遅れており、その分追いつかせるのに苦労したと言われた（ソ

ルトスプリングでエコロジカルプログラムに参加していたためとの暗喩もあった)。

担任の先生の反応に愕然としたのと同時に、彼女と私たちの目指している教育のゴール、心のもち方、大切にしていることなどは、全く異なっていることを確信した。

私たちは、子どもの読み書き能力などは、子どもの好奇心、または学びへの意欲が出てきたときに、ほぼ自動的に、かつ、深いレベルで浸透し、身につくものとして理解していた。一方で、担任の先生は、早期に基本的な学力をあげることに集中することで、より効率的な学習ができるという、いわゆる古典的な教育方法を実践していた。

どちらの方法が正しいとも、間違っているともいえない。確かなことは、私たちが異なるアプローチをもっているということだった。

そんなとき、お母さん友だちのひとりから、ホームスクールをするグループの存在をきいた。

週一回、学校のクラスルームの一室で、ホームスクーラーが集まる。授業というよりも、情報交換または交流のための場。ホームスクーラーの社会性を育てる場でもある。生徒の見学にいくと、いろんな学年の、いろんな個性をもった子どもたちとその親たちがいた。高学年の子どもたちが、低学年の子どもたちに教えたり、一緒に遊んだりしている。スナックを食べたいときに食べたり、話したいことを話したいときに話す、自由な時間の過ごし方が印象的だった。定期的にコミュニティからゲストを呼んでの特別授業もある（ミュージシャンが音楽を教えたり、ソーラーパネルの技術者が太陽電池についての教えたり、バラエティに富んでいる）。

お母さんたちに、「なぜホームスクーリングを選んだのですか」ときくと、理由は様々だったが、皆に共通していたことは、「うちの子に合っているから」ということだった。

私自身、日本の学校教育で育ったせいが、学校に行かずに学ぶことは、ほかの”普通”の子どもたちにフィットできない敗者のような、どこか罪悪感をもたなければならないようなイメージがあった。

ここにはそのような空気は全くない。それどころか、多くの生徒は、毎日学校に通う子どもたちよりもなにかに卓越して優れている、私の視点からいうと天才児ともいえるような子どもたちもたくさんいた（芸術でも、専門性のあること、なんでも）。ホームスクールという、時間の枠組みがゆるい環境で、子どもたちは許されるだけの時間を、自分の好きなことを伸ばす時間に費やす。小学生ながら、アメリカまでヨットデザインを習いに行ったり。・・・子どもたちの可能性は無限だ！

中には、恥ずかしがりやでスクールバスに乗りたくない子や、傷つきやすい子などもいたが、彼らを含め、ホームスクーリングは、彼らが彼ららしく生きるための、ベストオプションであることに変わりはなかった。

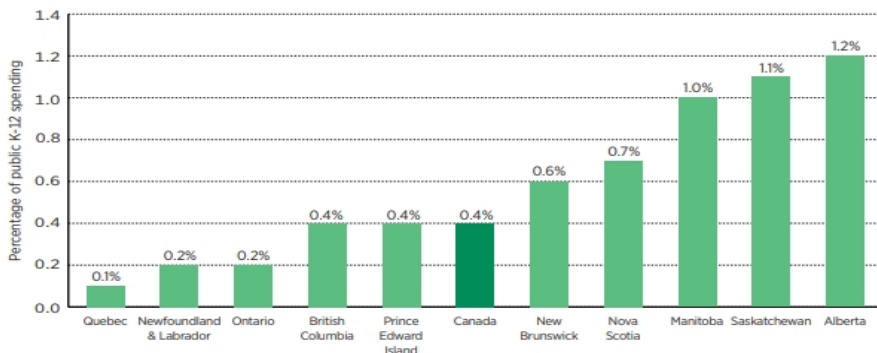
見学後、私たちもホームスクーリングを試してみることに決めた。もし合わなければ、また学校に戻ってもいいかと思った（実際、何人か、ホームスクールと通常学校を行ったり来たりしている生徒もいる）。

幸い、私たちの参加しているホームスクールプログラムは、実はいわゆる純粋なホームスクールではなく、ホームスクールと学校教育のハイブリッドのような存在。ホーム”ラーニング”という、

BC州ならではの、公立学校に所属しながら、BC州の教員免許をもった先生の監督のもと、ホームスクーリングを行うという仕組み。本人の希望によって学校行事に参加することも可能で、卒業すれば通常の卒業資格が与えられる。

しかも、ホームスクールに参加する子どもが増えると、政府や学校側にとっては、その子どもへの教材費、設備費などの経費が節約できる（図2参照）という理由から、ホームラーニングプログラムに登録した生徒一人当たり、一定の教育補助金が与えられる。これまで私たちも、多くの魅力的な教材（インターネットで見つけた、自分の好みのテキストブックなど）をはじめ、水泳や音楽レッスン、オンラインコース、実験教材など、数々の恩恵を受けてきた。

Figure 3: Savings from Home Schooling, as a Percentage of Total Public School Spending, 2011/12



Note: This analysis includes only students who are enrolled with a local school district or ministry or department of education in their province as home schooled. Students registered in Distributed Learning and Distance Learning are excluded.
Sources: Van Pelt and Emes, 2015; BC Home Learner's Association, 2014; provincial ministries and departments of education (see "Government Sources", pp. 52-57); calculations by author.

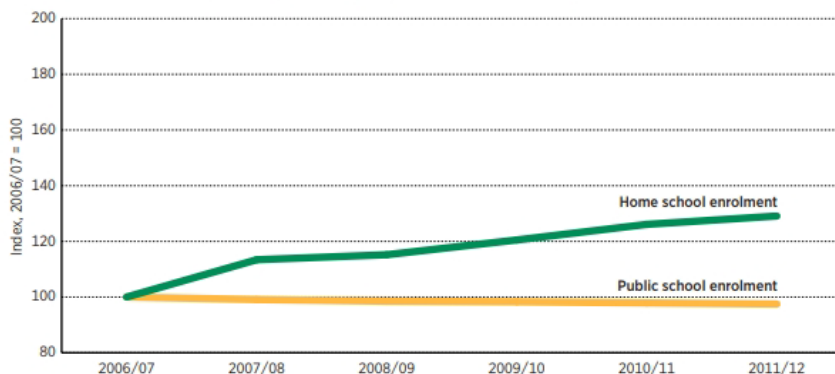
fraserinstitute.org
© Home Schooling
Adventure

図2 「パブリックスクール経費のうち、ホームスクール導入を理由に節約できた経費の割合（カナダ州政府ごとの統計）2011/12年」

出典：Home Schooling in Canada: The Current Picture - 2015 Edition (Deani Neven Van Pelt, Fraser Institute)

ちなみに、カナダ全体ではホームスクールへの登録数はパブリックスクールの登録数と比べると、増加中（図3）。2006/07年と2011/12年を比べると、カナダ全体で29%以上の増加が見られる（表4）。

Figure 2: Canada—Change in Total Enrolment in Public Schools and Home Schools, 2006/07-2011/12, indexed to 2006/07



Sources: enrolment in home schools from provincial ministries and departments of education; enrolment in government schools from Statistics Canada, 2013, 2014 (see "Government Sources", pp. 52-57); calculations by author.

fraserinstitute.org

© Home Schooling
Adventure

図3 カナダ全体でのパブリックスクール2006/07年の登録数を100%として、2006/07年から2011/12年にかけてのホームスクールへの登録数の変化

出典：Home Schooling in Canada: The Current Picture - 2015 Edition (Deani Neven Van Pelt, Fraser Institute)

特にBC州では、純粋なホームスクールの登録数は減っているが、上でも触れたホームラーニングプログラム（Distributed Learningともいう）をホームスクールに含むと、登録数は、倍以上に増加している（表4）ことに注目したい。

Table 4: Home Schooling, Enrolment by Province, and as National Aggregate, 2006/07-2011/12; and as Share of Public School Enrolment, 2011/12

	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	Change 2006/07- 2011/12	Share of public-school enrolment (%)
British Columbia (H-S only ¹)	2,711	2,789	2,722	2,463	2,228	2,084	-23.1%	0.4%
(H-S + D-L ²)	14,449	18,598	20,395	24,942	29,765	27,370	89.4%	5.0%
Alberta	6,633	7,291	7,658	8,097	7,856	8,000	20.6%	1.4%
Saskatchewan	1,222	1,790	1,790	1,923	1,949	2,044	67.3%	1.2%
Manitoba	1,175	1,235	1,289	1,677	1,639	1,816	54.6%	1.0%
Ontario	3,584	3,711	3,502	3,584	4,745	4,948	38.1%	0.2%
Quebec	148	788	937	1,012	1,057	1,037	31.6% ³	0.1%
New Brunswick	515	532	499	537	551	662	28.5%	0.6%
Nova Scotia	665	731	753	754	937	855	28.6%	0.7%
Prince Edward Island	46	54	59	55	68	81	76.1%	0.4%
Newfoundland & Labrador	74	107	107	112	124	135	82.4%	0.2%
Canada ⁴	16,773	19,028	19,316	20,214	21,154	21,662	29.1%	0.4%

Notes: This analysis includes only students that are enrolled with a local school district or ministry or department of education in their province as home schooled. Students registered in Distributed Learning and Distance Learning are excluded (except in the one calculation for British Columbia). During this period, the number of students registered in Distributed Learning or Distance Learning increased in all four provinces for which such data were available to us (Newfoundland & Labrador, Ontario, Saskatchewan, and British Columbia). In British Columbia, distributed learning student enrolment increased most dramatically.

(1) Includes only home-school students. (2) Includes both home-schooled students and distributed-learning students. (3) The percentage change for Quebec is calculated from 2007/08 because of an anomalous data point for 2006/07. (4) Education is a provincially responsibility in Canada so the national number is an aggregate of provincial enrolments. All enrolment statistics provided by e-mail from official sources within each province's ministry or department of education (see 'Government Sources', pp. 52-57).

fraserinstitute.org
© Home Schooling
Adventure

表4 カナダ（州ごと及び国全体）での2006/07年から2011/12年のホームスクール

登録の変化とホームスクール登録の割合

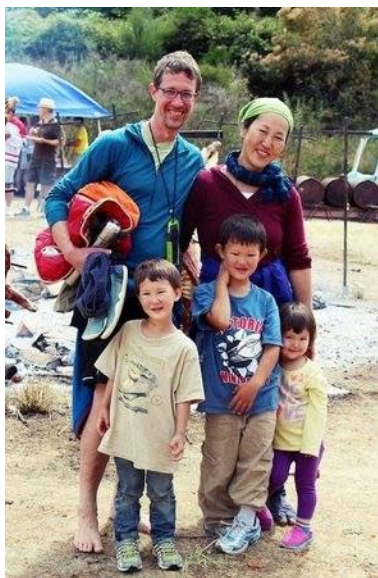
出典：Home Schooling in Canada: The Current Picture - 2015
Edition Deani Neven Van Pelt, Fraser Institute)

自分の子どもに合う教育が、学校教育とたまたま重ならない場合、ホームスクールというオプションがあることは、とても重要なことだ。ホームスクールやフリースクールを、不登校児対策の、学

校に行かせることを最終目標にした、通過点とみなしてはならない。

近年、BC州の教育カリキュラムが大きく変わり、小学校で、これまでのいわゆるABC評価をなくしていくこととなった。学びの進度の数値化をやめ、協調性、クリティカルシンキング（批判的に考えられる力）、コミュニケーション能力を高めることに重きをおき、生徒がより深く、より意味のある学びをすることを促す。

日本の教育の中で、生徒ひとりひとりが、将来を担う人材として、個々の人間として扱われ、ホームスクーリングを含め、自由な教育の選択肢をもてる日が来ることを願いつつ。



ベンソン（進士）万里子

Mariko Shinji Benson 氏

プロフィール

カナダ・ブリティッシュコロンビア州ペンダー島で、3人（8・6・4歳）の子どもをホームスクーリング中。オーガニック農家に長年暮らしたこともあり、趣味はガーデニング、天然酵母パンをはじめとする、発酵食品づくり。子育てと庭仕事に追われつつ、自然豊かなアイランドライフを満喫中

私が「おはなしワクチン」を始めた理由。

蓑田雅之

2017年の暮れから、私は「おはなしワクチン」という活動を始めました。

といっても、何のことかさっぱりですよ。実は、「おはなしワクチン」はこの世から不登校をなくしていく講演活動なのです。

病気にならないためにワクチンを打ちますよね。同じように、この「おはなし」を一度聞いておくと、お子さんが不登校にならなくてすむのです。そう、この世から不登校をなくす魔法の予防薬、それが「おはなしワクチン」です。

え？ 不登校がなくなる？ ということは子どもを無理やり学校に戻すってこと？

いいえ、そうではありません。そのまったく正反対。

学校なんかに行かなくて、子どもは立派に育っていくというおはなしです。

いま、日本には不登校の児童生徒が13万人以上いるといわれています。その子たちはみんな学校に行けなくて苦しんでいます。苦しんでいるのは子どもだけではなく、親もまた苦悩のなかにいます。

でも、知っていましたか？

「本当は学校になんてまったく行かなくてもいい！」のです。

一般的な学校に通わなくても、子どもは立派に育っていきます。私の子がそうでした。

私の息子は不登校ではありませんでしたが、「東京サドベリースクール」という学校以外の学校(オルタナティブスクール)に通い、普通に育っていきました。

サドベリースクールには先生がいません。授業もありません。毎日ゲームでも、読書でも、勉強でも、なんでも好きなことを好きなだけやっつけていい学校です。この日本には、そんな自由な学校に通って、のびのびと毎日を笑顔で過ごしている子どもがいっぱいいるのです。

もし、万一お子さんが不登校になっても、焦らないでください。慌てないでください。学校から「登校させてください」と言われても、待ってもらってください。子どもが「学校に行きたくない」と言い出したとき、保護者として言うべき言葉はただひとつ、「嫌なら学校に行かなくていいよ」です。

法律的に見ても、子どもに「就学の義務」はありません。憲法で教育の「権利」は保障されていますが、「義務」は定められていないのです。

また、2016年12月に成立した「普通教育機会確保法」の付帯決議には「不登校は学校生活その他の様々な要因によって生じるもの」であり「不登校というだけで問題行動であると受け取られないよう配慮すること」とあります。現行の法律制度のもとでも、不登校になった子は無理やり学校に行く必要はないのです。

なぜ、不登校がこんなに問題になっているのか。その理由は二つあると思います。一つは「義務教育」の「義務」をみんなが勘違いしていること。そして、もう一つは「学校外の多様な学びの場」があることを知らないこと。この二つ、つまり「子どもが嫌なら学校に通う必要はないこと」「多様な学びの場があること」を保護者が知っていれば、そもそも不登校は問題になりません。いまの学校を辞めて、お子さんにふさわしい学びの場を選べばいいだけの話だからです。

ここで詳しくは述べませんが、日本にも、世界の素晴らしい教育

エッセンスを取り入れた学校がたくさんあります。シュタイナー教育、サドベリー教育、イエナプラン、フレネ教育などです。また、フリースクールやホームエデュケーションという教育のメソッドもあります。こういう「学校外の学びの場」でイキイキと育ち、メキメキと個性を伸ばしている子どもがすでにたくさんいるのです。

「学校に行く、行かない」で苦しんでいるのはもったいない。ぜひ、外の世界に目を向け、学校を飛びだして、お子さんの個性にふさわしい教育を選択してください。

このような情報を広くお届けするために、私は「おはなしワクチン」の活動を始めました。企業では従業員向けのセミナー形式で、保育園や幼稚園では保護者向けのお話し会という形式で、「おはなしワクチン」の接種をさせていただいています。

目標は「不登校」という言葉をこの世からなくすこと。「不登校」の負のイメージを払拭し、イキイキした「多様な学び」の世界があることを知っていただくこと。一人ひとりの子どもの権利を守り、個性に合った学びが自由に選択できる日が来るまで、私はこの活動を続けていきたいと思っています。



蓑田雅之氏 プロフィール

早稲田大学第一文学部卒業、職業はコピーライター。一般財団法人「東京サドベリースクール」外部理事。現在16歳になる一児の父親。「東京サドベリースクール」に子どもが通うようになって従来の学校教育のあり方に疑問を持ち、教育分野の研究に着手。主に自立した人間を育てるための保護者のあり方を探究する活動を行っている。東京都内、埼玉県ときがわ町、栃木市、日光市等で開かれたお話し会で講演するとともに、「未来の先生展2017」にて「サドベリー教育カフェ」を主催。また企業向けセミナー「不登校がなくなる おはなしワクチン」を開催し、幼稚園・保育園にもその活動を広げている。

私たちが営む野外学校では、子どもの感性やいのちを育むことを大切にしています。子どもが生まれてからは、子育て仲間と共に、野山で山菜採りや森で焚火をし、親も子も自然のなかで存分に遊んできました。

共に育った子どもたちは、現在は中高生・大学生になり、個性を軸に自分の興味のある学びの道に進んでいます。学校に行かない時期に、学校以外のコミュニティである自然と仲間に支えられた子もいます。

我が子も不登校を経験しましたが、自然と家庭を学び舎に感性を育てることを第一に過ごしました。感性を育てる教育は、どんなことから気づきと学びがあります。子どもに内在する優しさと真の賢さは、人との出会いと経験によって養われるのだと気づかされてきました。

さて、ここからは、不登校経験のある娘(現在高校2年生)からのメッセージ。

Q あなたにとっての不登校は？

私が不登校になった時期が小学低学年だったこともあるけれど、親が与えてくれた学びの機会を通して、毎日を創造し、自分の学びをデザインできたことは、私の自主性の土台になっていると思います。

Q 具体的にどんな生活をしていたのか？

基礎的な学習は通信性のテキストで自主勉。図書館やミュージアム、歴史資料館や環境科学館など施設を利用し、物事の仕組みから理解する経験をたくさんすることができた。知識を記憶するだけでなく、自分の生活や社会に関連づけて物事を考える能力を育むことができた。

Q 不登校の子どもたちへのメッセージ

学校はひとつの居場所であって、すべてではない。学校に行くことが辛くなりすぎたら、一度、そこから離れてみる。そしてまた新しい道が見えてくるかもしれない。学校の勉強だけがすべてではない。学校の利点は仲間と一緒に勉強でき、社会性を身につけることでもあるけれど、それは学校以外でも学ぶ機会はあると思う。そうした場を自分で見つけていこうと気持ちを切り替えたいと思う。

Q 学校と不登校の違い

私にとって不登校時代は豊かな学びができた期間だった。知識は学校で学ぶよりは少なかったけれど、私の人間性を養う、自分の土台を確立する、意味のある深い時間だったと思っている。

Q 親のみなさまへ①

不登校は家庭が唯一の居場所です。親が一番の理解者であると思います。学校にいかない子どもが、なにか興味をもったことがあったら、全力でサポートし、とことんやらせてあげて欲しい。

親や社会の常識的な価値観で判断せず、子どもの主体のまま、やらせてあげて欲しい。そこから絶対に、その子のその先の道が見えてくるから、それを信じてあげて欲しい。

Q 親のみなさまへ②

親が悪いとか、親に問題があって不登校になってしまったということはないと思います。

親が罪悪感を感じる必要は全くありません。

不登校の時は心や意識がこもりがちです。対話から気づき生まれ、対話によって考えがまとまります。

言葉にしていくことに意味を持っていきます。親子で対話する時間を大切にしてほしい。不登校に限らず、いま社会のなかで求められていることだと思います。

私たち家族は、娘の「学校にいかない」という問いから学校や社会を見つめ直し、子どもなりの学び方をその都度、選んできました。心の折れるようなピンチも幾度もありました。そんな時は、自然や友達、新しい出会いに助けられ、乗り越えてきました。

自らが感性を通して経験したことは、一過性の知識と違い、他者と分かち合うことができます。そしていつしか智慧となり、誰かのお役に立つことがありますようにと信じています。



戸高優美氏 プロフィール

鎌倉在住。
野外学校 FOS 事務局。

小さな頃から自然が好き。
大学では野外教育を専攻。
教育現場で学びを積み、
現在、夫と野外学校 FOS を
営む。高2と中1の娘の母。

「フィンランドから見る日本の学校教育」

建石尚子

学力世界一と呼ばれた国、フィンランドの話です。

2016年の秋に、スクールインターン生としてフィンランドに滞在しました。授業を見ていると、全員が同じノートを使っていることに気づきます。ノートがなくなった生徒は、先生から新しいものをもらっていました。

フィンランドでは、日本と同様に小学校1年生から中学3年生までが義務教育であり、どの子どもも教育を受ける権利があります。そして、教育を受ける際にかかる費用はすべて無償です(ちなみに大学まで無償)。授業料、教科書はもちろん、給食費や交通費も。学校で使うノートや鉛筆、消しゴムも買う必要はありません。フィンランドの教育で注目すべきところは学力の高さだけではなく、学力格差の小ささだと思います。できる子を伸ばすことよりも支援が必要な子に手厚くサポートをします。そして、どのような家庭の下に生まれたかが、学力へ影響することがほとんどありません。すべての子どもに、その子どもに合った教育を無償で受けることができるような教育制度が確立しています。

もし、学校へ行くことが困難であったり何らかの問題が生じた場合は、教員、保護者、生徒だけではなく心理カウンセラーやソーシャルワーカー、時には医師など状況に応じて必要な専門家が集まり、その子どもにとって良い選択は何か、どんな支援ができるかをみんなで話し合います。もちろん最終的な決定権は子どもと保護者にあります。とにかくその子どもをサポートすることに徹するのです。子どもを学校に合わせようとするの

ではなく、学校が子どもに合わせる努力をします。学校には、その子どもが自身の個性に合わせて成長していける環境を整える責任があります。どの子どもも、その子どもに合った教育を無償で受ける権利があるので、そこから外れることはありません。全ての子どもへ教育の場は開かれており、全ての子どもは国によって守られています。

フィンランドではフリースクールやオルタナティブスクールなど様々な教育の場が用意されているのではなく、公立学校の中にその子どもに合わせた新しい教育を取り入れようという方針をとっています。公立学校だからこうでなければいけないという規定が極めて少なく、教員の裁量で子どもに合わせた教育を公立学校の中で行うことが可能です。まずは公立学校の中でできる限りの支援をし、それでも困難な場合は別のスペシャルスクールと呼ばれる学校へ行くこととなります。そこで学ぶ場合も、もちろん無償です。

フィンランドでは 1990 年代に大きな教育改革を行いました。その時に学校や教師に自由な裁量を与え、現場を信頼し、現場に任せる方針を取ったのです。その方針によって確立したのが、今のフィンランドの学校教育です。

日本では 1990 年代から学校へ登校しない「不登校」と呼ばれる子どもが急激に増え、彼らは「学校へ登校できない問題のある子ども」として扱われてきました。大人たちの目標は、その子どもを学校へ適応させることだったからです。適応させようと試みても状況が変わらない場合、保護者はその後どうしていけば良いのかと悩み、子どもは学校に行くことができない自分をさらに責め続けます。ですがそれは、国が定めた画一的な教

育を受けることを善とした教育制度から生まれた苦しみでしかありません。

今、既存の学校が合わない子どもに合わせ、その保護者や教員を始め、多くの方が民間の力で新しい学校をつくっています。また、全国には私立学校や一条校以外の学びの場を含めると様々な方針の学校が存在します。数は多くありませんが、公立学校の中でも志ある教員が改革を始めています。それによって多くの子どもが自身に合った教育を受ける機会を得ています。

学校へ行かない子どもを責める理由はありません。

学校へ行かない子どもの保護者を責める理由もありません。

大切なのは、多くの方が受ける教育を選択することではなく、一人の人間が自立して幸せに生きるため教育の選択をすることです。そして、私たち大人には、そんな選択が当たり前のできる社会をつくっていく責任があるのです。



建石尚子氏 プロフィール

株式会社 LITALICO 指導員。
千葉県生まれ。大学卒業後、2011 年より数学教師として中高一貫校に就職。中学 1 年生から 3 年生の学級担任を勤める。教師の働き方や画一的な学校教育に疑問を感じ、2016 年 3 月に退職。同年 10 月から 3 ヶ月間、フィンランドに留学し、インターン生として現地の中高一貫校を視察。社会全体の価値観が学校教育に大きく影響していることを実感する。個に合った教育が当たり前を受けられる社会を作りたいと考え、2017 年 6 月より株式会社 LITALICO に就職。現在は、児童指導員として発達の違いや偏りにより困難を抱えている子供に対して発達支援を行っている。

多くのところある大人たちは、気づき始めています。

インターネットの普及や仮想通貨の登場など、
社会の仕組みが激変している中で、
受験の勝ち組が人生の勝ち組になるケースは減りつつあること。
テクノロジーの進化は、多くの人の仕事や生活を変えていくであろうこと。

生きていくために必要な情報の質がどんどん変わっているのに、
学校だけがずいぶん昔からかわっていないって、変じゃない？

海外には、ユニークな考え方でつくられたカリキュラムで勉強できる学校があったり、
ホームスクールとして自宅で勉強することが認められていて支援も受けられたり、
高校や大学への進学機会も保障されているのに、
日本では、国が決めたカリキュラムで学ばないと、学んだことを認めてもらえないって、変じゃない？
学校に行かない、という選択を自らできている君たちは、
これからの自分たちに何が必要で、何が不要なのかを感じ取ることができて、
行動で「No!」を正しくアウトプットできる。
今の日本にとって、一番大事なことができる、とてもとても貴重な“人財”なのです。

だから、胸を張って「学校には行きません」と言ってください。

君たちのような子どものチカラを信じて、社会のほうを変えていかなくては!と思っている、ところある大人は着実に増えています。
自由な学びの中にある大きな可能性に気づいて、ユニークな学校を作っている大人。

学校以外に、いろいろな体験をさせてくれる場を提供してくれる大人。

いまある学校を、少しでも変えていこうとしている大人。
それから、一番身近で一番君たちの事を気にかけている、お父さん、お母さん。

そんな大人の存在に気づいてください。

そして、一緒に人生の「最善の解」を探していきましょう。

なぜ、「正解」じゃないかって？

たった一つの「正解」よりも、
複数の「最善の解」を導けるチカラこそが、これからの社会を
生き抜くために必要だから。

そして、こころある大人の端くれだと思っている私から、君たち
にお願いです。

日本の将来を、くれぐれもよろしくお願いします！



谷本たまき 氏 プロフィール

株式会社イロんな学校ドットコム 代表取締役
株式会社 Educube ゼネラルマネージャー
PC8801 でベーシックを組んだことをきっかけ
に開発の面白さに魅せられ、医大教務職員からIT
業界に転職、多くの海外案件に参画する。日本
人エンジニア特有の問題に直面しつづける中で、
世界と仕事をするための「多様性」について深く
考えるようになり、最終的に「1つの正解ではな
く、いくつもの最善を導く教育が必要」との確信に至る。出産後、自
身の子どもの就学先を検討する中で、多様な学び方に着目した学校情
報コミュニティの必要性を実感し、イロんな学校ドットコムのビジネ
スマodelを構築。2018年2月、ウーマンズビジネスグランプリ in
品川 2018 グランプリ受賞。

ゼネラルマネージャーを務める株式会社 Educube では、首都圏で人
気の親子体験「Gifte!」向けに各種講座の提供を行うほか、IT業界で
の経験を活かし、子供から大人までの各年代向けのプログラミング講
座・ママ向けのプログラミング講師養成講座などを提供している。

教育の現場から



第四次産業革命が世界中で進行中だ。

AIが「単純に考える仕事」をどんどん人間から奪ってゆく。

日本企業の多くも、血眼になって組織を変え、AIを研究開発し、人材育成の方法も改革している。進化できない企業は淘汰されてしまうからだ。

世界中でホームスクールが増えている。

私は、この教育方式の変化が、第四次産業革命に適応するための「進化」のプロセスだと考えている。普通に登校していても、子どもが生き残れない。意識しているか否かにかかわらず、親たちは、直観的に子どもの社会生存のために動き始めている。

座学、暗記、板書、教科書、ドリル、受験……およそ200年前にプロシアで発明され、その後、100年以上にわたって、世界中で、第一次～第三次産業革命を支える人材育成に使われてきた教育システムは、もはや、沈みゆく船だ。不登校は、激変する社会に適応し、生き残るための、賢い戦略なのかもしれない。

不登校はピンチではなく、チャンスなのかもしれない。

私自身、不登校を経験したし、小学二年の娘もフリースクールに通っている。

私は不登校を正面から受け止め、なおかつ、ポジティブにとらえるべきだと思う。

不登校なんて怖くない。それは、環境に適応し、「進化」するための自然なプロセスなのだから。



竹内 薫 氏 プロフィール

東京大学教養学部教養学科（専攻、科学史・科学哲学）・東京大学理学部物理学科卒業。マギル大学大学院博士課程修了（専攻、高エネルギー物理学理論）。理学博士（Ph.D.）

大学院を修了後、サイエンスライターとして活動。物理学の解説書や科学評論を中心に100冊あまりの著作物を発刊。2006年には「99.9%は仮説～思い込みで判断しないための考え方」（光文社新書）を出版し、40万部を超えるベストセラーとなる。物理、数学、脳、宇宙、・・・など幅広い科学ジャンルで発信を続け執筆だけでなく、テレビ、ラジオ、講演など精力的に活動している。また大の猫好きでもあり、著作物の中に猫（シュレディンガーの猫）も度々登場する。

クリエイティブ・キャリアデザインのすすめ

神崎史彦

高校生のキャリアデザインの流れは2方向ある。「川下り型」「山登り型」（多分、両者を行き来する、というのが正しいのだろうけど）。

川下り型は「職業選択」→「学部選択」

山登り型は「学部選択」→「職業選択」

前者。特定の職業に触れ、憧れを抱き、就きたい仕事を決める（これを「夢を抱く」という）。そのあとに、なぜその職業なのかを考え、それに近づける学部を選択する。

後者。興味のある学問を探り、時にはオープンキャンパスや模擬授業で学問に触れ、学部を選択し、その成果をもとに職業選択をする。

いずれも学部での学びをあくまで「勉強」に近い位置づけとして捉えている。勉強とは既存の知識に追いつくためのものとして捉えること。

しかし、学問を究めるというのは、そういうことではない。既存の知識を横目に、新たな知識を構築する、まさにクリエイティブな営み。解明されていないことや答えが割れている問題や課題を解き明かすという試みに他ならない。

けれども、高校生は「学校は勉強するところ」というのが当たり前だと捉えているから、学問と勉強を混同しがちになる。だから、既存のことを「覚えればいい」という感覚で学問を捉えてしまう。

しかも、前者ならともかく（職業に就くための勉強をするというところからは強ち間違いではない）、後者ものちに待つ「新卒採用」を念頭に置いて学部を選びがちだから、「役に立つか立たないか」といった視点で学部での学びを捉えてしまいがち。

また、前者は「未来に新しい職業が生まれること」「今ある職業が衰退すること」を想定していないということだから、将来高校生を路頭に迷わせる要因にもなる。

私はこうした様子を高校の現場で数多く見てきて、ずっと疑問を抱いていた。なぜ高校生は学びが退屈そうなのだろうか。逃げるのだろうか。学びに対してつまらなそうにしているし、大学で真剣に学ぼうという気概を感じない。それは、就きたい職業を選択することに縛られているからなのか、自分の学びたいことに出会えていないからなのか…

だから、私は「クリエイティブ・キャリアデザイン」を提唱している。これは「山登り型」の発展形。

「探究」→「学部選択」→「職業選択（起業含む）」

学問の出発点はやはり自己の興味から「探究」をし続けること。自分の体験を契機に小さな違和感（「なぜ？もっと知りたい」「何か変だ」）をもとに仮説・調査・検証を重ね、もっと専門的に探究するために学部を選ぶ。そして、その学びの延長線上に職業を位置づける。仕事がなければ起業すればよい。

自分が興味ある探究を突き進め、創造的に人生設計するスタイルだから「クリエイティブ・キャリアデザイン」と呼んでいる。

ただ、この「探究」、邪な思いが混じると、「自分が」探究したいことと離れてしまう。「就職に有利かどうか」とか、「この大学に入りたいから、関連する探究を」とか、考えた瞬間に、自分の素直な探究心からかけ離れてしまう。

「本当にこれを探究したかったのか」という疑念を抱くということ。

現状では受験学年から（正確には偏差値による大学受験を見据えた進路指導を始めてしまった段階から）探究をはじめるとは、本人にとって苦しくなりがち。

特に「川下り型」の高校生のキャリアデザインを思いっきりぶっ壊すことになるし、探究しても邪な気持ちが入り混じって辻褃合わせに走るようになり、迷走することがよく発生する。

未来をつくるのは、まさに今を生きる若者たちだ。しかし、我々は、若者が希望を見出せずに混沌とした世界をつくり出してしまっているのではないか。そして、日本の進学および就職慣習に囚わ

れ、その環境に順応する若者たちを生み出しているのではないか。慣習というルールから外れることに恐怖を抱いていないか。

だが、そうではない。自分の人生は自分でつくってよいのだ。その原動力は「探究心」と「自他を尊重する心」と「誠実な熱意」。学びに真摯に向き合い、楽しみと喜びを感じながら、その先の人生をつくり上げてほしい。時には壁が立ちはだかることもあるだろうし、先が見えなくなる瞬間はある。それを乗り越えるのは、成長マインド。楽しいことなら、多少大変なことがあっても乗り越えられるし、未来には成長した自分が必ず待っている。若者にはこうした思いをもって、新しい世界をつくりあげてほしいと願っている。



神崎史彦 氏 プロフィール

株式会社カンザキメソッド代表。

東進ハイスクール・東進衛星予備校をはじめ、全国各地の高校や大学にて、志望理由書・自己

推薦書・小論文・面接対策の講義・講演を担当し、延べ5万人以上が受講・聴講している。アクティブラーニング型小論文講座等、2020年大学入試改革に向けた取り組みを加速中。

直近では、私立中高における学校教育改革コンサルティングを行っている。「キャリアと未来の世界は自分たちの手で創る」がモットー。学校法人大東文化学園エデュケーショナル・スーパーバイザー、21世紀型教育機構（21st CEO）リサーチ・フェロー。

未来から考える教育

～親が自分を愛することからはじまる子どもの成功哲学～
川本 潤

子どもにとって良い教育とはなんでしょうか。

3人の子どもを持って教育について取り組んできた結果、むしろ教育が必要なのは大人の方なのかもしれないと思うようになりました。子どもたちは産まれた時から皆素晴らしく多くを教えてくださいました。親として私にできることといたら、子どもの邪魔をしないこと、子どもの可能性を奪わないこと、その子らしさの輝きを曇らせないこと、それくらいしかありませんでした。強いてあげるならば、こうなってほしいと願う人間像に、自分自身が近づいていく後姿を示すことくらいです。変容を厭わず挑戦を楽しんでいる大人が近くにいと、子どもも人生と生命を愛し続けることができるはずだからと。

私がなぜこのような考えに至ったのか、教育をどのように考えていったのかをこれからお伝えします。

教育は他の商品と決定的に違う側面があります。

それはすぐに成果が表れないことです。もしかしたら半年経っても一年経ってもわからないかもしれません。なぜなら、教育の成果物は未来の社会だからです。未来をつくるため、未来に対応するために教育というものがあります。そのため教育を考えるには、まず未来を予測する必要があります。従来までの延長線上にある未来なのか、それとも私たちが経験したことのないような未知の景色が広がっているのか。

未来予測には様々な方法がありますが、まずは予測可能な数字から推測していきます。国の行く末を予測する上で、その構成員となる人口統計と年齢構成は欠かせません。

現在、合計特殊出生率は1.44で超高齢化・超少子化社会に拍車をかけています。内閣府の発表した将来推計によると、総人口は2015年から減少傾向に向かい2060年には8,674万人にまで減り、同時に65歳以上の人口割合を示す高齢化率は39.9%になると発表されています。これは約10人に4人は高齢という構成で、未成年層をのそくと、働き盛り世代1.2人で1人の高齢者を支えるという「肩車型」社会へ突入します。

一方で、経済成長においても人口が減少するだけマーケットも縮小していきます。さらに社会保障費の負担が増大し大幅な増税となって働く世代へのしかかります。世界的に見ても、1975年ローマ俱樂部で発表された「成長の限界」にあるように、地球資源の限界から2030年を機にあらゆる成長が一気に下降へ転じるということが試算されています。またピケティが「21世紀の資本」で言うように、格差は拡大の一途で上位1%への富の集中が加速度的に高まり、資本主義経済とグローバル経済の限界が露呈しています。また年金制度はどれほど機能してくれるのでしょうか。

現在でさえ、国民年金支給額は65,008円(満額納付者)で、厚生年金は標準給与で計算すると100,165円という試算があり、合計で165,174円(月額)となります。これが20年後30年後に改善されているという期待はあまりもてません。にもかかわらず、支出となる生活費は平均で283,027円と算出されています。一方で、医学の進歩により人生100歳時代となります。寿命が延びることは喜ばしいことですが、社会保障がままならない状況では、死ぬまで働くことが必要になってきます。

一生働くにしてもどんな企業に就職したらいいのでしょうか。バブル崩壊以降、構造的な原因としての経済の停滞は「失われた20年」どころか30年40年と続いていく心配すらあります。いわゆる一流企業と言われてきた大企業でさえ、ひとつとして安泰な業界はないというのがここ数年の素直な感想ではないでしょうか。例えば日本の背骨である自動車業界でさえ、仮にGoogleが法を整備して完全自動運転カーを流通させた時には業界地図が一変します。

さらには、シンギュラリティという人工知能が人間の知能を超えて社会進出をしてくるタイミング2045年と予測されていますが、昨今のAIのディープラーニングの状況などを鑑みるとさらに前倒しになることが予想されます。オックスフォード大学のマイケル・オズボーン准教授の研究では、今後10~20年で現在の職業の47%がAIに取って代わられると提唱されています。従来までは成績のいい子は医者か弁護士になりなさいと奨励されてきましたが、それらの職業ですらすでに飽和状態にあるだけでなく、人間の医者が発見できなかった病気をAIがほんの10分で発

見して患者の命を救う時代になってきています。どんな名医だろうが生涯で診察する患者数はたかが知れていますが、AIのビックデータならば全世界の全患者のカルテと照合できるわけです。また、アーティストのような感性の職業でさえ、AIが描いたレンブラントの作を観てしまうとその意味を捉えなおさざるを得なくなりま

す。
こうした未来で子どもたちはどのように生きていけばいいでしょうか。親としては、子どもが大きくなった社会でどのように活躍してほしいと願いますか。それでもまだ、競争社会の勝者になるために、躍起になって早期教育をしていい学校へやっぴ一流企業へ就職させたら安心ですか。

これからは私たちが経験してきたような受動的な「いい社会」は姿を消していくことでしょう。残念ながら、史上最も予測不可能な未知の世界へと突入します。従来までのやり方や制度が通用しないのであれば、自らが自分の人生を切り拓いていくしかありません。自己紹介をする時に、会社名を名乗るのではなく個人の名前で生きていくアイデンティティーのあり方へシフトしていくでしょう。

時には職業名すら手作りの肩書で、収入のポートフォリオを複数保有するような稼ぎ方が安心できる逞しさとなっていきます。そこに必要なのは、与えられた問題を解く力でしょうか、それとも創造的な思考でしょうか。

新しい学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」が確かに必要な時代になります。でも、それってどんな学びなのでしょう

か。
私は、それは教育ツールのことではなく、生き方のことと連動していると捉えています。自分の人生を、主体的に他者や社会と対話しながら深く探求し、自らの知性と感性で創作していく生き方のことだと。

自分の人生を切り拓いていくということは、簡単なことではありません。必要最低条件として高い自己肯定感が必要です。不安から生きるのか、可能性から生きるのかを選択できる人がいるとしたら、それは自己肯定感の高い人間です。

最近では不登校の相談を受けることが多くなりましたが、親が平気であれば子も平気なものです。親の不安が子の肯定感を下げてしまいます。持って生まれた「生きる力」は大人が邪魔しなければ絶対

に奪われるものではありません。親が不安になる理由は自分の人生が不安に支配されているからです。「生きていくためには働かなければ」「自分を愛するためには認められなければ」と、私たちの世代は多くの「すべき」に支配されています。生きることは大変なことなのか、それとも喜びなのか、子どもはそれを親から学びます。子どもに人生を楽しんでほしければ、まずは親が人生を楽しんでいる必要があります。特にこれからの未曾有の未来においては、しつげよりも感性が成功のカギを握ってくることでしょう。教育熱心な親の「愛」は時として子どもの可能性を狭めているのかもしれませんが、子どものためではなく、まずは自分のために生きることは親になると途端に難しくなりますが、まずは自らが人生を謳歌することが子どもの成功への近道なのかもしれません。環境は学校が、方法は教材が与えてくれますが、それをどう使うかが一番大切です。親も子も、生きるための哲学教育とでも言うべきものが、人生の背骨に必要な気がします。

余談ですが、この原稿を書いている時点で長男は不登校ですが、それが何か問題だと思ったことはありません。成績や教育に関係なく、彼は偉大な存在だからです。



川本 潤 氏 プロフィール

未来の教育コンサルタント（不登校アドバイザー）・パートナーシップ2.0カウンセラー・自分の名前で食っていくためのシンデレラプロデューサー・教材開発ベンチャー役員

京都大学経済学部卒。東急エージェンシー、サニーサイドアップを経て杉山愛のマネジメントを行う株式会社川本企画設立。産休を機に3年の主夫業、シュタイナー学園広報室長の後に現職

光を当てる角度を変えれば必ず輝く場所がある

上木原孝伸

みなさんこんにちは。N 高等学校の上木原です。

この文章はきっと子どもたちも目にしていると思いますので、できるだけ易しく分かりやすく記したいと思います。

N 高等学校は 2016 年に開校したネットの高校です。今春 3 年目を迎えました。入学者は 1 年目 1482 名、2 年目 2002 名、3 年目 2752 名と年々増加しています。認知が進み、支持してくれている方が増えているということももちろんありますが、N 高等学校を選ぶ生徒が増えている理由はそれだけではないと感じています。

実は N 高等学校を選んでくれている生徒のうち約 7 割が不登校を経験したことのある生徒です。不登校の理由にはさまざまありますが、私は大きく二つの理由があると思っています。

一つは、人間関係や学業等でつまずき、学校に通うことが難しくなったという生徒です。そういった生徒は自己肯定感（自分のことを正しいと思える気持ち）を失った状態で N 高等学校へ入学してきます。その場合に必要なのは、まずは自分自身を見つめ直し「自分のレベルでしっかりできること」からコツコツと積み上げていき、まずは自己肯定感を高めることです。

そういった意味でも N 高等学校をはじめとした通信制高校の学習は「自分でやらないと進まない」ことから、一般的に通学する高校よりも自分でやっていくという責任を問われることは多くなります。レポートを規則正しく提出するという経験から、自己肯定感を得られるようになっていく生徒も数多くいます。

N 高等学校が保護者の方に 2018 年 3 月に実施したアンケート「お子さまが変化したこと」から以下を抜粋します。

「高校に通えなくなり、自信を無くし無気力で毎日ダラダラ過ごしていた娘が、レポート期日までの計画を立て、やりきった。そのことにより、少しですが自信を付けてきているように見えます。スクーリングでは、授業の楽しさ、わかりやすさに驚いていました。1 日のうちで、やるべき事があるということは、娘にとっては意味のあるもののように感じます。規則正しい生活が少しずつ送れるようになってきています。このことは、今の娘にとってとても大切な事なので、このような変化があり本当に嬉しいことです。」

こちらの保護者の方の感想のように、自己裁量で進めていくことで「自分ごと」に置きかえられる。そして、少しずつ自信を付けていき、成長した自分に出会う。そうした経験を積めるのが N 高等学校の存在意義の一つです。

一方で、N 高等学校に来る生徒の中にはこれとは別で学校に「あえて」行っていないという生徒もいます。そしてその割合は徐々に増えていると痛感しています。それは「今学校でやっている勉強が将来どのように役に立つのかわからない」という理由です。勤のいい子どもたちから気づき始めている矛盾。日本もこの時代の動きを見据え、大学受験改革を進めていますが、年々このような生徒は増えていると面談しながら感じています。

中には「自分の大好きなプログラミングの世界に没頭しているうちに気が付いたら不登校になっていた」という生徒もいます。そういった生徒は消極的な理由で学校に行っていないのではなく積極的に自ら学びたいと思ったものに時間を費やしているのです。こういった矛盾に気づいてしまった生徒を私はあえて「非登校」と呼んでいます。

今、日本の社会は大きな 4 つの変換の時代を迎えています。

- ①知識から創造の時代
- ②平均が無意味化する時代
- ③一生学び続ける時代
- ④AI と共存する時代

以下、詳細を紐解きながらこれからの時代の学びについて触れたいと思います。

①「知識から創造の時代」

2018 年は日本にスマートフォンが上陸しちょうど 10 年になります。上陸したころはその機能に半信半疑だった日本人も多かったのですが、瞬く間にほぼ全員がスマホを手にししました。スマホは携帯電話の枠を超え、掌をインターネット化したのです。すなわちそれは世界の知識が瞬時に得られることと同義でした。そうすると知識そのものよりも知識を組み合わせ、どのようなものを創造するかという部分が今後の世界では圧倒的に重要になります。人間は本来、幼稚園で粘土づくりをするような「何かを創出すること」にワクワクするものです。しかし、一方通行の授業ではなかなかオリジナルのものを創るという機会は生まれにくく、そのうち学びに対する興味を失ってしまう子どもたちがいるのも事実で、非常にもったいないことです。

②「平均が無意味化する時代」

日本は高度経済成長期から右肩上がりに発展を続けてきました。しかしバブルがはじけてからの日本は失われた 20 年と呼ばれていま

す。高度経済成長期からその余韻が残っていた時代までは平均点を取ることで幸せが保障されてきました。しかし、皆が右肩上がりではない時代の中で平均点を取ることで、必ずしも幸せが保障されないことはこの20年間の経済情勢や就職難が表しています。

平均点を取ることよりも、自分の得意なことを磨き、武器にしている人の方がむしろ幸福感が高い時代がもう来ています。そしてその武器は学校の中で学習する科目の中にはないかもしれません。

③「一生学び続ける時代」

いま先進国の寿命は1日5時間というスピードで延び続けており、2045年には、平均寿命が100歳に到達すると予測されています。しかも、若くて健康なまま歳をとる時期の長い時代が来ています。日本の少子化も合わせて考えると今までのように、20年の教育、40年の労働、20年の老後、という人生モデルはすでに破綻しているといえるでしょう。このような時代の中、人生では何度も学びなおすことが必要です。そして先の例のように知識が意味をなしにくい時代になると、「学び方を学ぶ」そして「一生学ぶことにモチベーションを保てる」ことが重要になります。

④「AIと共存する時代」

近い将来、人工知能の能力が人間の脳を上回る時代が来ると言われています。このことにより人間の仕事が奪われると悲観的な議論も散見されますが、私はいよいよ人間が人間らしい仕事ができる時代が来るとワクワクしています。

機械やAIに仕事が置き換わることによって、様々な仕事で定義が変わります。

たとえば、介護の仕事では車いすを押したり、お風呂に入れたりという仕事は機械やAIが代替してくれるようになるでしょう。しかし、お年寄りの話し相手になってお互いの心を豊かにすることは機械に代替できません。

教師の仕事も変わってくるでしょう。知識を教えることはスマホで置き換えられます。授業も日本一上手な先生の授業をARで目の前にいながら聞く、という技術も生まれるでしょう。でも学習に対してやる気を持たせたり、人生の岐路に悩んだ時に話をしっかりと聞いたりする仕事はきっと残っていくでしょう。

つまりAIと共存していくときに鍵になるのは、「人の心」を深く考えられる力です。

以上のような4つの大きな変化の波の中で、実は自宅でプログラミングをし続けていた生徒こそが未来を見据えているといえるのではないのでしょうか。

- ①プログラミングという知識と技術によって成果物を創造している。
- ②自分の得意なことに夢中になり腕を磨いている。
- ③人に頼らずインターネット等を使いながら独学で学びを得ており、学び方を学んでいる。
- ④自分は学校に行っていないという葛藤の中で、自分とは何者かについて深く洞察している（これは私が実際に面談した生徒たちとのやりとりによる感想です。非登校の生徒は大変感受性が高いと見受けています）

多少強引な話ではありますが、私は非登校の生徒にこそむしろ日本の将来を背負うポテンシャルがあるとさえ感じています。もちろん

ん、「今、元気に学校に楽しく通っているよ」という子どもを否定するものではありません。そういった力も社会には必要です。しかしながら学校に行っていないという点においてその子どもの自己肯定感を失われたり、不要なレッテルを貼られたり、学習機会が奪われたり、ということは日本にとって大きな社会的損失であると感じています。「どこで学ぶか」よりも「何を学ぶか」が大切な時代が来ているということです。

全ての子どもたちは可能性の塊。光を当てる角度を変えれば必ず輝く場所があります。N 高等学校の使命はそれを見つけだし、話を聞き、導き、磨き上げ、そして飛ばたいってもらうことだと考えています。



上木原孝伸 氏 プロフィール

学校法人角川ドワンゴ学園
N 高等学校 副校長。

大手教育企業で講師として 17 年間
教壇に立ち、受験指導に携わる。

偏差値教育の限界と IT×教育の可
可能性を感じ、2015 年に株式会社
ドワンゴ教育事業本部に移籍。

「カドカワの創る新しい時代に合ったネットの高校」として誕生した N 高等学校の開校に携わり、2017 年 4 月より同校の副校長に就任。日本全国で生徒が学習しているネットの高校の運営という前例のないチャレンジに挑むとともに、ニコニコ動画のシステムを利用したネット双方向授業、ネットの高校ならではのコミュニケーションなどの N 高の魅力、そしてこれからの社会を生き抜く子どもたちにとって必要な未来の教育などについての説明会や講演活動を行っている。

私が中学生の時、母から一冊の本を渡されました。

その本には学校に通えない、通っていない子たちが「フリースクール」と呼ばれる通学形態を持たない学校でのびのびと生活している様子が書かれていました。当時進学校と呼ばれる学校で日々勉強に明け暮れていた私は「なんでこの子たちは学校に行っていないのだろう？」「授業は受けてないのに卒業なんてできるの？」、そんな疑問を持たざるを得ませんでした。

そのインパクトは、家庭教師という職業を選ぶ原点であり指針となっています。

通常、学校ではみんなが同じ方向を向いて席に着きます。「右にならえ」、「みんな仲良く」。しかしその本には「右にならえ」なんて概念は存在しませんでした。それぞれが今やりたいこと、必要だと思うことをしていました。「みんな仲良く」同じことをする、なんてこともありません。

人間誰しもが同じ考えで、同じ行動をとるなんてことはあり得ません。それではなぜ、小学校から中学校までは義務教育という名で同じことをみんなでしなければならないのでしょうか。

今は当時と違い、より色々なものを若いうちから吸収することが可能です。世界中の人々と簡単に繋がることができ、たくさんのお情報を得ることができます。その情報を元に子どもたちは自ら考え成長していきます。その中で、自ら「学校に行かな

い」選択をする子どもたちも多く出てくるでしょう。今の子どもたちにはたくさんの選択肢があります。先の言葉のように、誰もが同じことをする必要はないですし、全員が仲良く一緒に毎日を過ごす必要なんてありません。私は多くの選択肢が与えられている彼ら彼女らを羨ましく思います。

不登校になった子どもたちを私は何人も見えています。

私からしたら、彼らは「学校に行けない」のではなく、「学校に行かない」という選択をただけなのです。学校に行かない理由はそれぞれです。それぞれの子たちが悩みぬいた結果、学校に行かないという選択肢を選んだのだと思います。

そんな彼らは不登校になったあと、その後の進学はどうなったのでしょうか。

中学時代の不登校はなんだったのかと言いたくなるような成長をみんな見せてくれました。

通信制高校の生徒会長になった子、進学後は毎日休まず通うようになり、ゆくゆくは海外留学を2回も経験した子。それぞれが自分に合った場所を選択したことにより、のびのびと生活できるようになったのです。

では彼らにとって中学時に不登校になったことはマイナスだったのでしょうか？

これだけ自分がやりたいこと、やっていて楽しいと思えることに出会えたのですから、むしろ不登校を経たことはプラスに働いているとすら考えられます。学ぶことはいつでもできま

す。今学校に行けずに悩んでいる子ども、いつしか行動できる日が来るはずです。

それまでの間、一体どのようなことをすればいいのでしょうか。当然ですがそれはその子によって変わります。

私が伺う際をケースとして挙げるなら、1時間ひたすらお話をするだけの子ども、一緒にゲームをやる子ども、本当に様々です。

大切なのは、その子と関わりを持つこと。

「好きなこと」「今興味があること」「吐き出したいこと」「家族には言いづらいようなこと」「共有してほしいこと」。その子その子によって、今やりたいこと求めていることは変わってくると思うのです。だからこそ、私は何か「これやる！」とは決めず、その場その場で判断して行動しています。大人にとって無駄に思えることでも本人たちには「今」必要な事なのです。頭ごなしに無駄だ駄目だと否定するのではなく、「目の前にいる子どもの一番の味方で」いてあげてください。

そうやって他者と関わりを持つことによって、少しずつ彼・彼女たちは外の世界に興味を持つようになります。それでも他者が提供できる世界はほんのわずかで、子どもたちが羽ばたくきっかけにしかありません。実際にこれから目にしていくのは本人たちです。次の舞台がいつ、どこにあるかはその子次第ですが、それまでにその場所への架け橋を作ることが大切です。

ぜひとも他者との関わりを持ってください。

それは不登校で悩むお子さまだけに限らず、それを支える保護者の方でも構いません。素敵なアドバイスをくれる方、ただ話

を聞いてくれるだけの方、それこそ様々な出会いがあるはずで
す。もちろん焦る必要もありません。

今お子さまを向かわせるべき場所は学校ですか？

人生の終着点は今通っている学校ではありません。

それはあくまでも通過点です。

次へのステージに向けて準備をすることが大事なのだと私は思
います。そういった出会いの中で、何か次へのヒントを得られ
ること、そしてお子さまがいつしか羽ばたいてくれることを私
は願っています。



金原 崇人 氏 プロフィール

趣味：読書、映画鑑賞、ゲーム

職歴：学校支援員として別室登校に悩む子とふれあううちに、「不登校や別室登校に悩む子たちの役に立ちたい」という思いを持つようになり家庭教師に。2017年3月、会社専属家庭教師を経て独立。不登校や別室登校、支援学級に通う生徒を積極的に受け入れ、各生徒に合った指導を行う。

家庭教師のみらいホームページ <http://katekyo-mirai.net>

ブログみらい先生の指導日記 -家庭教師のみらい-

<https://ameblo.jp/katekyo-mirai/>

「学校は先生が子どもに勉強を教える場所」日本人なら誰でも知っている神話が、今崩れようとしている。子どもたちが学校から去り始めている。

学力重視の日本の教育機構。その中にすっかり組み込まれて歯車と化した教師、原動力となる親の期待。今の学校は、正に秀才製造機と呼ぶにふさわしいマシンである。機械に入れられた子どもという素材は、まず個性と自由をそぎ落とされる。豊かな発想を摘み取られる。そして、集団の中に放り込まれて、いかに自分を殺して生活するか、身をもって叩き込まれる。さらに、役に立たず、おもしろくもない各種の知識を短時間で頭に詰め込まれる。こうしてでき上がった製品は、みんな同じ形をした、「組織の歯車」という優秀な規格品である。これを別名エリートと呼ぶ。

また、機械では必ず、途中ではじかれてしまったり規格に合わなかったりした不良品が出る。それが不良少年、あるいは不登校児と呼ばれる子どもたちである。

果たして、教育は機械であってよいのだろうか。集団に合わせられない子どもたちを社会の不良品として片付けてしまってよいのだろうか。文部省（現、文部科学省）は今頃になって、ようやく不登校児の存在に目を向け始めた。その数が、昨今激増して、もはや無視できなくなったのであろうか。

所詮、文部官僚も教育委員会の役人も学校の先生も教育マシンが作り出した「規格品の歯車」である。それなりのエリートである。そんな人たちには、不良品のレッテルを貼られてし

まう子どもたちの気持ちは分からないのだろうか。優秀な教育者の皆さん、どんなに頑張っても努力してもエリートになれない子どもたち心の叫びが聞こえませんか？」

これは、私が20年前、若手教師だった頃に書いた文章です。不登校を巡る学校の立場、教師の意識は20年前と今とでさほど変わっていないと感じます。

文科省はようやく、中学校を卒業していても夜間中学校で学び直しができること、学校以外のフリースクールでも出席を認めることを決めました。しかし、地域の学校に在籍することというルールは頑なに守ろうとしています。

「学校に行かない」という選択肢は、社会的に必ずしも認められているとは言えません。多様な学びを認める体制はまだ不十分です。一流ではない、中途半端なエリート意識をもった教師が、学校に適應できない子どもを、無理矢理、昔、秀才であった自分が経験してきた型にはめようとする時代錯誤な教育も変わっていません。

先日、勤務校で職場体験学習がありました。うちの区では5日間の体験をすることになっています。私が担当したスーパーマーケットに、学校には、ほぼ毎日遅刻してくる、勉強には全く意欲を示さないゲーム好きな男子生徒がいました。体験前には、遅刻しないで5日間通えるのか、学年教員は皆心配しました。しかし、それば杞憂に終わりました。

私が巡回でそのスーパーに行ったとき、彼は、学校では見たこともない生き生きとした表情で、飲料水のペットボトルの品

出しをしていました。同じ職場の生徒に聞いたら、「彼は毎日一番乗りで職場に来ています」と言っていました。彼は、「仕事の方が勉強より楽しいです！」とまた仕事に戻って行きました。

勉強に向かない生徒は、早めに働く経験をさせる等、多様な生徒に合った、多様な学び方ができる教育システムを早急につくる必要があると感じます。



佐瀬順一氏 プロフィール

埼玉大学 教育学部卒。現在荒川区の中学校に勤務。

荒川区、江戸川区の中学校を経て、東京都立葛飾盲学校に中学部国語科教諭になる（※中3で作文に書いた「盲学校の先生になる」という夢が叶う）。

平成8年 国立がんセンター中央病院、院内学級で指導。教え子 羽田香織さんが書いた物語が「点字で書いたラブレター」（同友館）として出版される。同僚と環境NPOを立ち上げ、「環境書道展覧会」開始。平成20年 東京都教員研究生として東京都教職員研修センターに勤務。研究テーマ「対話を重視した道徳授業の工夫」（研修センターホームページで閲覧可能）

若手教師のための教育研究会「明日の教室」東京分校を実施。代表を務める。道徳郷土資料として執筆した文書が教育出版1年生用道徳副読本「心つないで」に掲載されるなど、多岐にわたり教育活動を常に生徒目線で行なっている。

主な著書 総合学習アイデアブック3巻「はじめようボランティア活動」（ポプラ社）、先生のためのやさしい点字講座（学事出版）

THE いじめ指導、THE 説得（生徒指導編、学級指導編）共著（明治図書出版）月刊生徒指導（学事出版）他 雑誌、書籍原稿多数執筆 平成21年 東京新聞教育賞受賞 ※小中合同「環境書道席書会」の実践について。東京新聞教育賞ホームページで閲覧できます。

高校生から見た日本の教育



「学校を飛び出した社会へ」

小林大真

今や多くの先進国で教育、勉強は非常に重要な立ち位置にあります。

日本も例外ではなく、日本の子どもたちは7歳頃から「義務教育」として、『学校』という場で決められたものごとを覚えることになっています。

この『学校』は、色んな子どもたちが一堂に会し、一箇所で勉強をします。

さて、私は現在高校一年生の歳で、日本に住んでおり、ならばこの義務教育を受けた筈。しかし、私は、ある程度の勉強しかできていません。

それはどういうことかといえば、私は「不登校」だったということです。

今、勉強は学校に通うことで脳に刻みつけるもの。それが義務づけられています。

しかし学校では、誰かが少しつまづいたらどこまでも置いてけぼりにしてしまう。私も、学校に置いてけぼりにされました。学校に行かなかったから自業自得？違います。私は、突然の変化などで度々パニックに陥る特性がありました。頻繁に誰かと衝突したり、落ち着かなかったりして、勉強の妨げになるからと教室を追い出されました。

学校に行かなかったのではなく、学校に追い出され、置いてけぼりになり、行けなくなった。そして私は学校に行かなくなっ
てから、模索の日々を過ごしました。

残念ながら、当時私は家での勉強が頭に入ってきませんでした。しかし、学校にも行けない。私は勉強以外のことに熱中するようになっていきました。寺社を巡ったり、物書きをするなどに打ち込むようになりました。

模索の日々では多くの学びを得ることができました。しかし、自分が何をしていたのか、何をしているのか、何をすべきだったのか、何をすべきなのか、それは今でもわかりません。経験浅い子どもたちは何をすべきかなんてわかりません。

それを示す道標は必要であると思っています。しかし、それはひとつだけではない。数多の選択肢が生まれ、初めて総活躍へと繋がるとと思っています。

例えば今、私は高校生として、勉強に再び取り組もうとしています。そして、その高校は、学校に行けなくなった子どもたちでも、家から高校の勉強ができるようにここ数年で作られた、新しい居場所です。それは「N 高等学校」という学校ですが、これから先、同様に、多様に、様々な居場所が示されていき、それらが容易に入っていけるような社会になっていくことを祈っています。

人間は共感覚を持つ生き物です。あらゆる形で、明るい感情を共有できる、そんな社会になることを祈っています。



小林大真 氏 プロフィール

高校 1 年生。

小学 4 年生の時、引越しをきっかけに学校を休みがちになる。その後寺社めぐりなど趣味に没頭し小学校 6 年生のときに東京大学・異才発掘プロジェクト 2 期スカラ―候補生に選ばれる。

中学校はほぼ登校ゼロになり、より趣味に打ち込む時間を手に入れたことで活動の幅を広げ、現在は高校 1 年生。』

意味の無い革新は、終わりにしないか。

既存の教育を充実させて、その適合者のみを育成することが教育であってはならないはずだ。子ども達には、教育制度の革新よりも、教育者の意識改革が重要なのではないだろうか。

私がそう考える理由は、大きく分けて二つある。

一つは、不登校生徒への対応や、虐待の隠蔽体質があるからだ。

学校に来ない生徒を『不登校』と一言で表す事は正しいのだろうか、という単純な疑問がある。その生徒は『行かない』のではなく『行けない』のかもしれないし、それは、虐待についても同じ事が言えるだろう。『言わないから虐待は無い』のではなく『言えないが虐待はある』ということなのだ。私の知り合いに不登校の生徒がいるのだが、彼の家には毎日、担任からの電話がかかって来るらしい。明日は来なさい、と催促をされるそう。確かに、学校に行くことは様々な面において有意義である。しかし、それが必ずしも学校である必要は無い。従来の『学校で学ぶ』という概念を子どもに押し付けるのではなく、その子どもに合った教育の形を、共に探すべきなのだ。

もう一つは、教育におけるドグマチズムだ。

先に述べた『学校に行かなければならない』という固定概念が例である。大半の教育者はその概念に基づいた教育をするし、また、その概念は子どもにも引き継がれていこう。この課題を解決するためには、教育者の根本的な概念を変えるべきなのだ。

また、その意識改革の手段としては“他者との対話”が挙げられる。例えば、私自身も参加したイベント“Edcamp”である。

そこでは、公立私立学校の先生を 始めとする教育者が参加されていて、『この現状を変えたい』と口々に語られていた。

意識の高い教育者は、既に行動しているのである。

しかし、一部がそうであったとしても、教育者全員が変わることは無い。いわゆる『いい教育者』ばかりが力を伸ばし、それらの大半は取り残されてしまうのだ。それでは、根本的な課題解決には繋がらないだろう。従来の教育に警鐘を鳴らし、自ら行動するような素晴らしい教育者が存在する裏で、固定概念の押し付け(ドグマチズムの横行)は今も行われているのである。

私は、そのことが勿体無いと思うのだ。

したがって私は、教育者は意識改革を進めるべきだと考える。また、その手段として、より多くの教育者が対話の機会を利用すべきだと考えている。先述した“Edcamp”の他にもたくさんのイベントがあるから、より多くの教育者に、是非活用して欲しい。多様な教育の創造に、誰一人として取り残されるべきではないのだ。



富山 秀哉 氏 プロフィール

三浦学苑高等学校 2 年。
高校入学がきっかけになり教育とは何かを考えるようになる。
様々な立場の教育関係者が集う edcamp にも積極的に参加し、自分の立場からできる教育改革について日々勉強中。
趣味はサイリウムダンス。

ちょっとブレイク。教育機会確保法とは？

みなさん教育機会確保法をご存知ですか？

「教育機会確保法」は、正式には「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」という名前の法律です。2016年12月14日に公布、2017年2月14日に施行されました。

内容を簡単に紹介すると、

- ☆不登校児童・生徒の無理な通学はかえって状況を悪化させる懸念があるため、子どもたちの「休養の必要性」
- ☆不登校児童生徒が行う多様な学習活動の実情を踏まえ、個々の状況に応じた必要な支援
- ☆不登校児童生徒が安心して教育を受けられるよう、学校における環境の整備
- ☆年齢又は国籍等にかかわらず、能力に応じた教育機会を確保する
- ☆国、地方公共団体、フリースクール等民間団体との密接な連携、財政支援

などが必要であると国の方針で定められました。

2016年に発表された不登校児童生徒数は13万人を超えています。しかしそのうち、民間の施設（フリースクール等）に通っている児童生徒は、わずか3%です。ほとんどの子どもたちが自宅で過ごしているのです。

行政が不登校問題の大きさを認識し、「学校以外の中で、児童・生徒が学ぶことの重要性」と「学校を休ませる必要性」について取り組み始めたことは、とても大きな意味があります。

社会全体で、すべての子どもたちが安心して過ごせる環境づくりを進めていくことが、日本の明るい未来につながるのだと思います。

子育てって、教育って、 何だろう？



不登校だった子ども時代を持つ多くの大人にインタビューする機会があった。

不登校になったきっかけを聞くと、意外な答えが返ってきた。

「あの頃のことを思い返しても、学校に行けなくなった理由は今もわからないんです」

不登校の理由について新聞や教育雑誌でみるデータがある。しかし、実際にインタビューしてみると全く当てはまらない。

親は子どもをなんとかしたいと考え、学校に行けない理由さえ解決すれば、対策が見つかる考える。子どものために、少しでもよい解決法はないかと、答えを探す。

何度も何度も繰り返し原因を尋ねる親に、子どもは親が納得する答えを作り出す。

親にも子にも悪気はないが、いつの間にか真実がみえにくくなっていく。

私自身の子どものころを振り返ると、「大きくなったら何になりたいの？」と親に聞かれ、親が機嫌良くなる答えを口にしていたことが記憶の中に残っている。

本と絵が好きだったので、絵本作家になりたかった。絵本作家というのも、親を意識した職業で、本当はアーティストやデザイナー、作家になりたかった。

しかし、小学校の高学年になると、「あなたは本が好きだから、学校の先生になるといいわね」と、刷り込まれた。

反発した覚えはないが、なんとかそのルールには乗らないようにデザインの雑誌を見たり、作家になるための準備を密かに始めた。

それにもかかわらず、私は我が子に同じ質問をしていた。

3歳だった男の子は満面の笑みで答えた。

「大きくなったら、きりんさんかぞうさんになる！」

なんてかわいいのでしょうと私は男の子を抱きしめ、親バカぶりを発揮した。

ところが、同じ質問に一つ年上の4歳の女の子は全く違う反応を見せた。

「う〜ん、ママは大きくなったら何になりたいの？」

「え〜っと、大きくなったら、そうねえ〜元気なおばあちゃんかなあ。」

「ふ〜ん、だったら私は大きくなったら立派な大人になるってことね」

子どもは親のことをよく見ている。いつの間にか仕草がそっくりだったり、癖がそのまま受け継がれたりしている。

それだけではない。子どもは親の気持ちにも敏感である。親が望んでいる答えを意識している。

私はちゃんとひとり一人の子どもと向き合っていたのだろうか。

それぞれの個性があり、親子といえどもその性格は明らかに違う。しかし、親は自分が経験してきたことが最も正しかったことのように、子どもにも当てはめる。

時代は明らかに変わっている。自分が育った時代とは違う。そのことを充分承知している。それにもかかわらず、親は自分の価値観を子どもに押し付けていることに気づかない。

親ができることは何だろうとこの時期に気づく出来事があった。

男の子は当時病弱で、小学校に入学するまで入退院を繰り返していた。退院のときに私は何気なくつぶやいた。

「やっと退院できるね。やっぱり健康が一番大切よね」

しかし、病院には健康な子どもはいない。無神経な私の一言を男の子は即座に否定した。

「一番大切なのはね、健康じゃないよ。夢と希望と命だよ」

子どもが成長する中で、私は何度もこの言葉を思い出した。親は自分の子育てに満足するために、いつの間にか子どもを支配していることもある。

「子どものために…」と言いながらやることに、子どものためになっていることはどれほどあるだろうか。

子どもに寄り添い、子どもと向き合い、共に成長していければ子育ては楽しい。

しかし、親として子どもをちゃんと育てなければならないという目に見えない重圧を、知らず知らずのうちに学歴や職業という目に見える成果に変えようとしてしまう。

5歳の女の子が、大人から見れば些細なことで大泣きをしていた。頑張って取り組んだ物事がうまくいかなかったのだ。

「あなたの気持ちもわかるけど、頑張ってやったことはよかったと思うよ。そんなに泣かなくても…」

私は慰めたつもりだった。しかし、彼女は

「ママはあたしじゃないのに、あたしの気持ちがわかるわけないでしょ！」

とさらに激しく泣いた。全身を振るわせ、顔を真っ赤にしながら、自分の失敗を悔しいと思い、それを体の外に洗い流そうとしているかのように。

涙は枯れることはなかった。

慰めてほしいわけではなく、ほっといてほしいと彼女は言っているのだ。

しかし、私は親だから慰め、号泣を止めなければならないと必死だった。

彼女の言葉を聞いて私はハッとした。

この子は私の一部ではないのだ。まして、私のものではない。

教育とは教え育むものではなく、子として、親として、ともに育つことなのだと思い刻んだ。

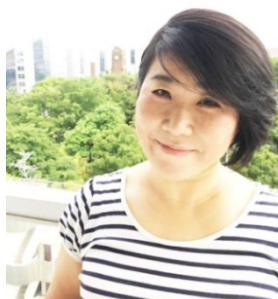
しかし、すぐに切り替えることはできず、私は親として何度も失敗するのだが、その度に子どもたちの言葉を思い出す。

これからの教育は時代とともにどんどん変化していくだろう。多様な学びの場も増える中、AI時代を迎え、今までの常識が通用しなくなることも予想される。

何がどうなるかわからない今、将来の不安のためにあれこれ模索するよりも、卒にとらわれることなく「今」を楽しんで生きることが最も重要だと思う。

勉強ができなくても、人とはちがう道を歩くことになっても、病気をしても、不自由があっても、そこに「夢と希望」を見つめることができることを育てることが教育であり、命の大切さを感じて感謝し、子どもの心に寄り添うことが子育てなのだと思い強く心に刻んだ。

伊藤史織 氏プロフィール



東京大学先端科学技術センター協力研究員
／執筆家（オフィスウィズトライアングル）／コーディネーター
長期取材によるドキュメンタリーやルポルタージュに携わる。「いきいきと生きる」ことをテーマに、脳・身体・心理・医療・教育というジャンルの書籍を多数制作。

著書：「異才、発見！」（岩波新書）

「生きるために人は夢を見る」（A-WORKS）

※中学道徳副読本（光村図書）に同タイトルにて書き下ろし文執筆

父親のつながる力と 多様な生き方・学び方

下村健士

お父さんたちに質問です。

「子育てについて相談できる仲間はいますか？」

今から6年前に、娘が不登校になった時、私にはそういう仲間はいませんでした。知人に相談しても、「学校に通わせなければいけませんね。」そんな風に一般論や、上から目線のアドバイスばかりされて、私の気持ちは全く晴れませんでした。

そんな時に、当事者の集う親の会や、教育について考える勉強会に参加しました。私は、びっくりされました。なぜなら、そこに集っているのは、お母さんたちばかりだったからです。女性たちは、自分の悩みを語り合い、ともに学びながらどんどん進化していました。苦しい胸の内を語る言葉、それを聞いているだけでなぜか私の悩みも癒されていきました。

子どもの不登校は、私たち親に子育てのあり方、そして何よりも自分たちの生き方をもう一度、見つめ直すチャンスを与えてくれます。そのことに、母親たちは随分前に気づき始めています。

では、父親は？

父親は仕事が第一。そんな昭和の価値観が今も社会にはあります。子どもは、いい学校に進学して、良い会社に就職をするというモデルは今は崩壊しているのに、家庭のことは妻に委ねて、父親は、相変わらず仕事が最優先。果たして今のままでいいのでしょうか？

こんな時代だからこそ、父親が心を許し合いながら子育ての悩みを語り合える場が必要です。昨年秋から、お父さんを対象に「子育てと教育を考える会」を月に一度開催しています。

仕事を終えたお父さんたちが気軽に参加できるように、テレビ電話を使って、夜の9時半スタートです。大阪や愛知、岩手、栃木など全国各地から約10名が参加しています。

この会は、誰かにアドバイスをするのではなく、仲間の抱えている問題に静かに耳を傾けます。そして、自分の悩みも、みんなが黙って聞いてくれるところが特徴です。だれかが胸の中を打ち明け

てくれると、自然とお互いの自己開示がすすみ、そんな本音の中から、たくさんの子育てのヒントが得られます。

住んでいる地域も、職業も年齢もバラバラな父親たち。ただ、子どもの教育について語り合いたい、共通するのはその気持ち一つだけです。

私はこの会に参加すると、心がとてもスッキリとします。そして、子育てについて、家族の形について考えさせられます。仲間とのつながりを感じて、生きるのが少し楽しくなります。

お父さんたちが子育てや理想の教育について語り始めたこと。生き方が多様になっていく21世紀の社会で、これはとても大切なことです。お父さん同士が繋がることで、仕事では得られない様々なものの見方や考え方を教えてくれるからです。

この世で大切なことは、人と深いつながりを持っていることです。信頼できる人がいるから、自分の問題を根本から見つめていくことができるのです。

子育てで成長していくのは、母親たちばかり。この現状を変えて行くことがとても大切です。私たちの小さな活動が、全国各地に広がればと願っています。

全国のお父さん。第3水曜日の午後9時半、私たちと一緒に語り合いませんか？



下村健士 氏 プロフィール

「ZOOM版 教育と子育てを語り合うお父さんの会」

1968年東京生まれ。小学高学年から母親のうつ病、父親の単身赴任などで生きづらさを感じる。大学卒業後、テレビ番組制作会社を経て、36歳で小学校の教師になるも、1年で挫折。心機一転、国内のフリースクールやアメリカやフィンランドの学校を視察して、2014年八王子に「多摩サドベリースクールさくらんぼ学園」を設立。「八王子不登校を考える親の会」を主催。好きな言葉は「今日一日」と「人生は一度きり」。趣味はクロスカントリースキーとオートバイのレース観戦。

思い通りにならないのが子育て。 だからこそ、愛すること

西野奈津子

私は発達に特徴のあるお子さんや学校など集団行動に困難を感じているお子さんを対象とした学習支援およびコミュニケーションスキル支援の教室を運営しています。

その活動の中で「子どもだけを見ていても本当の支援にはたどり着かない」と感じました。そこで見えてきたのが【母親支援】です。発達の特徴や集団行動の困難さは育児中の母親にとって多かれ少なかれストレスがかかります。そこで傾聴と論理療法を基本とした心理カウンセラーとして母親支援を始めました。

母親支援をしていると、その背景に注目せざるを得なくなります。まずは父親である夫との【夫婦関係】、さらにご夫婦の生い立ちにも様々な要因がありました。特に母親とその実母との関係も注目すべきものがありました。

そんな大人へのカウンセリングをする中で「学校に行かない」いわゆる不登校児のお子さんの親御さんがいらっしやることもあります。

父親であっても、母親であっても我が子には、それなりに夢を託すものです。

その思いは様々であって簡単に良し悪しで分かれるものではありません。しかし、子どもにも【個性】というものがあります。

「新幹線に乗りたい！」と山手線のホームで待っていても新幹線には乗れずに山手線が来ます。

「なんで、お前は新幹線じゃないんだ！」

と腹を立てても新幹線のように走りません。…とは言え山手線には新幹線にない良さがあります。一生に一度は山手線1周をやってみたいと思います。ゆっくり景色を楽しみながら一駅ごとに途中下車もあります。新幹線は鉄道の花形です。それなりの魅力はありますが一つ一つの地域の良さは味わえません。

自分の息子には「スポーツ万能で運動会では活躍してほしい！」…と期待しても、もしかしたら学校に行かないという選択をするかもしれません。

「学校に行かなければ将来、困るぞ！」なんて叱咤激励は、もはや時代遅れです。学校に行かなくても生き方は100万通りある時代です。

「なぜ学校に行かないんだ！」と腹を立てても、自分の元に来てきた子は学校に行かないという選択をした子です。山手線のホームで新幹線を待つのも同じです。

忘れてはいけないのはどちらも意味のある電車であるということ。学校に行っても行かなくても、どちらの存在も価値のある子だということです。

ただ、昔のように子どもが5人も10人もいれば、一人くらい学校に行かないという子がいても受け止められたかもしれませんが、現代のように一人っ子多くても3人くらいの子育てでは、やはり子どもに託す親の夢もなかなか手放せないのが現状でしょう。なかなか手放せない思いに寄り添っていくことも、大切な支援だと思っています。

『好き』という気持ちは大切だと思います。大好きという思いが湧き上がると元気になるし伝えられた人も嬉しいと思います。でも、好きが強くなりすぎて相手を自分の思い通りにしたいと思うと好きという素直な感情ではなくなります。

「私はあなたのことを、こんなに思っているんだからそれに応えてほしい！」そんな風に思いやすくなります。相手の幸せよりも自分の幸せを優先してしまう。

『愛し合う』ということは相手の幸せも自分の幸せも同じぐらい大切にできる強さです。

夫婦であっても「好き」というレベルの人は大勢いるように思います。「愛し合う」というレベルまで成長していくのが本来の夫婦の在り方だと思うのです。

そして『愛する』ということは、自分から心が離れてしまった人の幸せを素直に祈ることのように思います。愛するということは人間にとって最も強く冷静な感情に思えるのです。親が子どもに与える最高の思いは、この『愛する』ということだと思っています。



西野奈津子 氏 プロフィール

一般社団法人 ひまわり教室 代表理事
一般社団法人 子育てこころケア湘南 代表理事
育ちあいの家代表、日本メンタルヘルス協会公認
心理カウンセラー、一般社団法人しつもん財団認定
魔法の質問キッズインストラクター

一般社団法人アソシア志友館常任理事

鎌倉市在住 夫と娘2人の4人家族 元スポーツインストラクターとしての経験と、自身の子育て、また発達に特徴のあるお子さんや母親への支援をする中で得たものを踏まえた、より良い人間関係のための講演を多方面で開催。心のコもった彼女等身大の講演は、聞いて下さった方々のご縁の輪で益々広がっている。

どんな選択も、「自己表現」のひとつ

阿部あゆみ

学校へ行かない子ども達の中には、「学校の図工はきれい」と言う子が少なくありません。理由は、「せっかく頭の中にイメージがあるのに時間の中で終わらなくて、チャイムで区切られちゃうから」「好きなものを自由に作れないから」という声がほとんど。

子ども達は「自分が今何をしたいのか」、大人よりもよく知っています。

まだ経験も知識も少ないからこそ、「勘」や「感覚」を使って自分に合った栄養素かどうかを判断しながら、必死に吸収しているのだと私は思っています。

今回、冊子の表紙を担当させていただきました。我が家と繋がりのある、学校へ行っていなかったり、自由に学びを選択している子ども達に、お母様方を通じて声をかけさせていただきました。

なるべく綺麗にまとめたいのと、時間が無い…という大人都合から

「みんなの【色】を混ぜこぜしたいので、「好きな色」「じぶんといえば、この色！」を塗ってください。（絵でもいいです！でも全ては使えません）」という、「できたら色をください」という要望をお出ししました。

が、見事に半分以上の子ども達が「絵」を送ってきてくれました（笑）

中には、絵の解説を詳しく書いてくれる子まで！

そうそう、これこそが真っ直ぐな子どもの反応で、「これを描きたい！」と、具体性を持っている子ども達やその作品に改めて感動しました。同時にこちらは大慌てで頭を仕切り直します。

大人だとどうでしょうか。実際、私のアトリエでは「真っ白な紙に、自由に描いていいですよ♪」と言っても、躊躇ってしまう、描けないと言われる大人がほとんどです。それは「苦手意識」からくるものです。

描くこと以外にも、歌うこと、踊ること、話すこと、作ること…どんな表現も、「上手いか下手か」ではなく、子どもの頃は「やりたいかやりたくないか」「楽しいかつまらないか」で、じゅうぶんだったと思うのです。

今回の募集でも、「あまり興味がない、乗り気がしない」というお子様ももちろんいらっしゃいました。

この「やらない」という選択肢が、今の学校ではとても勇気のいることです。

本当はやりたくないのに、みんなも頑張っているからとやってしまう。

怒られるのが怖いからやってしまう…。その積み重ねでいつの間にか自分の感覚が鈍くなってしまうのです。昔の私がそうで、楽しくないのに周りに合わせて笑う自分が大嫌いだった時期がありました。

不登校の子ども達は、逆にその「自分の感覚」をしっかり保っています。

今回も、「うちの子は描かないみたいです～」と、本当は描かせたい気持ちをぐっとこらえて見守るお母さんのメッセージを何件かいただきましたが、そんな親御さんに守られている子どもたちはどれほど自分を信じて生きていけるだろうと、勇気をもらいました。

不登校は、日本だとまだ大変なことが多いです。けれども同じ境遇のご家庭は本当に沢山いて、それを知ることでも本当に救われてきました。

3人育児真っ最中でも迷いながら、壁にぶつかりながらも、まずは大人の自分から「表現」を恐れずにいたいと思います。

子供たちが必要な栄養素をぐんぐん吸収していくための、見えない根っこ作り。まだ見ぬ全国の仲間たちとも一緒に、これから未来を創っていきたいです！

表紙制作に協力してくれた全国の子ども達と保護者の皆様には、この場を借りて深くお礼を申し上げます。本当にありがとうございました！



阿部あゆみ 氏 プロフィール

アトリエ Roots / 色彩アートセラピスト
10歳、7歳、2歳の母。

幼少期から毎日のように好きな絵を描いて育つ。2歳下の妹が完全不登校、自身も中2で不登校を経験。デザイン専門学校卒業。壁画やデザインの制作会社勤務後、出産を機に主婦へ。夫婦や子育ての悩みがカ

ラーセラピーでラクになり、子どもの不登校と同時期に色彩学校へ入学、色彩心理を学ぶ。

恐れや不安から解放されると周りが変化することを実感し、家族にもアートセラピーを実践。現在は日々学校、家、集いを選択する子どもたちに対応しながら、不登校や家庭の悩みを持つお母さんを対象にアートセラピーで心の解放をサポートしている。

不登校からの未来を育てるターミナル「イクミナル」のメンバー。

◆ブログ <http://ameblo.jp/ayum-ing/>

◆FB ページ <https://www.facebook.com/atelierroots/>

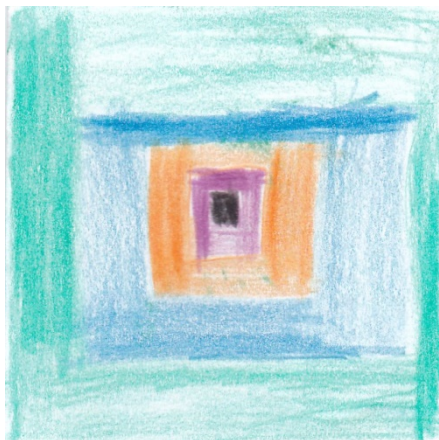
不登校から、今のフリースクールへ行くまでの心の心境を絵と文章で表してくれた、埼玉県の宝ちゃん（10歳）の作品。自分の心をしっかり客観視しています。



○にじの意味は私の気持をあらわしています。(今)半分くらいない気持と、半分りたしと大きい気持を表わしています。

時わりのぬってある色も気持の変化を表わしています。最初の暗い色はフリースクールに行きはじめたころの暗い心のこい色は今の私の気持を表わしています。少しずつこの先のことをかんがえていけるようになったことを表わしています。

不登校・多様な 学びの経験から



大人は、支援とか応援とかいう形で、社会的弱者にあたたかい声をかけてやるのが好きだ。でも、その行動こそがときどき「弱者」をつくりだしていることには、あんまり気づかない。子どもは気づく。

「不登校」は、学校に行かない／行けないこと・ひとの総称になっている。

小・中・高に通わず、気ままに遊んで過ごして、17歳になってから2ヶ月半で12年間の勉強をして、大学へ行った。これはわたしの話。

こんな例も「不登校」だという。

だから、学校に行かない／行けないなかにも、いろんなひとがいる。たとえば、かわいそうというレッテルを貼られることがいやなひと、貼られることで救われているひと、貼られてもいいけどそういうのってなんか気に食わないひと、心底どうでもいいひと。

合わない場所で耐え抜くより自分を生きるのがいい、と考えている親や大人がそばにいることは、ほんとうに恵まれている。すごくうれしいことだ。

でも、そう教えてくれた、伝えてくれた相手のほとんどは、「自分を生きる」ってどんなことか、体感として知っているわけじゃない。だからわたしたちは、わたしがわたしとして生きる姿をみる親や大人たちへ、なまなましい、「自分を生きる」そのありかたを返していくことができる。そうしておたがい、敬意を育んでいく。

学校に行くひとが特別なのも、学校に行かない／行けないひとが特別なのもない。わたしたちにできることは、いまある特別や普通を疑ってみることかなと、思ったりする。

吉田晃子 氏 プロフィール

1962年生まれ。二児の母。自身は口唇口蓋裂という障害、長男は重度の心臓疾患をもって生まれる。

長男、長女ともに学校へ行かないことを選択し、「親が子どもを信じないのであれば、子どもは親を信じられない」ということを学ぶ。

1988年に開校した日本最古のフリースクールのひとつ「フリースペースなわて遊学場」にてスタッフとして関わり、のちにサドベリースクールとして旗揚げ。以後、オルタナティブ教育に携わっている。2008年、娘の星山海琳とともに「デモクラティック・フィールドのらねこ」を創立。2016年からは星山とともに「AI-am」を設立。ブログでの発信や全国各地での講演活動、教育に関する講座などを続けている。

星山海琳 氏 プロフィール

1996年生まれ。2018年2月現在、大阪芸術大学在学中（4年生）。

6歳のとき、小学校へ入学してすぐ、学校教育への疑問が生まれ、小学校へ通うことをやめる。6歳から11歳までサドベリースクールで過ごし、12歳のとき、吉田とともに「デモクラティック・フィールドのらねこ」を創立。

その後、中学・高校へも一切通わず、17歳（学年では高校3年生）の夏、突然大学へ行くことを志す。

サドベリースクールではカリキュラム・クラス・教師などが存在しないため、一切勉強をしていなかったが、小学校1年生のレベルから勉強をはじめた全8教科（国語・数学・英語・世界史・地理・現代社会・生物・地学）を2ヶ月半で終え、高卒認定試験に合格。志望校の一般試験を受け、翌春、現役入学。在学中より、ブログでの発信や各地での講演活動を吉田とともにやっている。



ここ数年、私がそれまで信じていた常識がことごとく覆されてきました。それがあまりにも痛快だったからでしょうか。今はものごとを先入観で判断してしまうのは勿体ないと思うようになりました。

子ども達それぞれが不登校になった時はとても悩み、気持ち切り替わるまでにはいくつものステップが必要でした。自分の感覚と多数派の意見との狭間で行ったり来たり。どこかに答えがあると探していましたが、その答えは自分の中にありました。自分に踏み込む小さな一歩に大きな勇気が必要でしたが、踏み出してこそ真実に出会えて、今を楽しめていることを本当に嬉しく思っています。

子ども達の一途な想いやこだわり、決めて動いてきた先輩保護者の方々との出会いが、根柢なく保持していた価値観を壊してくれました。その代表的なものがゲーム。嫌悪感を持っていたゲームも実はとても奥深いことを知った時、子どもが夢中になるのもわかる気がして、「これじゃあ、学校に行っている時間はないかもしれないね・・・。」とつぶやいてしまいました。

外出は気乗りのしない子が、部屋でオンラインゲームをしながら、パソコンの Windows（窓）経由というルートを使って、いとも簡単に日本を飛び出し、異年齢多国籍のプレイヤー達とチームプレーを楽しんでいる。そんな事実を知った時に、子ども達の夢中はあらゆる垣根を超えるパワーを持っていると確信しました。

「不登校をグローバルに考える」というタイトルを自分の活動名に用いたのも、これらの経験から地理的、社会的なグローバルではなくて、部屋にいようが、どこにいようが、ボーダーレスで自由な選択や創造ができる、今はそんな時代であることを伝えられたからです。

不登校は、大人も子どもも新しい学び方と出会うチャンスです。「しっかり休むこと」も学びです。一般的な意見を気にせず、自分の「好き」「心地よい」を基準に選んでいきましょう。所詮、自分の知っている社会なんて世界のほんの一部です。

不登校は、自分の宝物をマイニングする大切な時間。

後ろめたく思う必要はありません。

停滞しているかのようで、子どもは毎日よく考えて成長しています。

何か違うと感じたら迷わず立ち止まる。

人生は、乗り換え自由です。

不登校から「学びの進化系」を生み出して、自分らしく生きられる社会を創っていきましょう！



加藤佳子 氏 プロフィール

イクミナル 代表
不登校をグローバルに考える会 主宰

長野県諏訪市出身。子ども時代にアパルトヘイトを知り国際平和を意識。20代後半やっとかなった留学先で「ありのままの自分」でいることの大切さを実感。帰国し育児のために勤務先を退職後、バリアフリーの心を子ども達に伝えたいと思い、1999年親子英語サークルを立ち上げる。以降19年間英語教育に携わる。子ども達の不登校経験により「学ぶ環境」について再考。ひとり一人が持ち味を発揮できる共生社会実現を願いさまざまに活動している。

「どうしてふつうに育てられないの？」

次男が中 1 の夏休み明けから学校に通えなくなり、それを知った義母が私に言った言葉でした。

私が子どもを甘やかして、みんなが“ふつう”にできる、学校に通うことさえもできなくなってしまったと。私だって、子どもに学校に行ってほしいと思うし、子どもに嫌なことから逃げないで立ち向かって乗り越えてほしいです。

この時、彼が直面した困難は、公立中学校の成績の評価方法や、先生の生徒を叱責する怒声でした。たしかに、彼は“ふつう”みんなが「そんなものだ」と受け流していることも、おびえてしまう繊細な子のようです。

ですが、そもそも学校は、提出物や発言回数、チャイム着席などで、増減する平常点の取り決めで、子どもたちに、いったい何を求めているのでしょうか。それは「勤勉で積極的で規律正しい生徒」なのかもしれません。

でもこの評価の尺度だけでは、おもしろいことを言って笑わせる子、忘れ物をした子にそっと物を貸してくれる子、家で兄弟の面倒をよく見る子、そういう子の良さは、評価できません。一つの生徒像で、子どもたちを順位づけていく学校は、多くの子どもにとって自尊心が持ちにくい、居心地の悪い場所になっていないでしょうか。たとえ不登校にならなくても…。

また、先生が生徒にあびせる怒声はどうでしょう。

大勢のエネルギーあふれる生意気盛りの子どもたちに、先生の話を聞かせることはとても骨の折れることです。

怒声をあびせる気持ちもわからなくもないです。私も、家で子どもがいうことをきかないと、きれて怒鳴ってしまうことがありましたから。

ただここで、大人が知っておかなければならないことは、子どもは大人よりも無力だということです。子どもは大人の保護の元しか生きられない存在なので、絶対的に大人のほうが上なのです。その大人が激しく怒ることは、子どもにとって、とても恐怖だということです。

もし強い力の持ち主である大人が、子どもの人格を無視して罵倒しようものなら、そこから逃げ出したいと思うのは、繊細なうちの子だけでしょうか。

次男は、ただただやさしい子だと思います。小学校3年生の時でした。クラス全員が一人の子をいじめた時も、うちの子だけは決して口も手も出さなかった。ターゲットになった子のお母さんが「それが救いだっ」と後で言ってくれました。彼のやさしさは、みんなが“ふつう”にいじめている時も、人を決して傷つけませんでした。私は、人を傷つけるのが怖いというこの子が、本当に愛おしく誇りに思えます。

もしも、誰もが、人を傷つけるのが怖いという弱さとやさしさを持つことができれば、一人ひとりの違いを受け入れて、穏やかに話し合える社会になるのではないかと、彼を見ていてふと思うのです。そんな社会がいつか“ふつう”になってほしいなと思います。

次男は中3になった時、区の不登校児の支援学級に、勇気をもって見学に行きました。本人も私も、家であまり人と会わずに生活していることがもう限界でした。次男は見学から帰ってきた時、うれしそうにこう言いました。

「自分が決めた勉強をするのを、先生が側でわからない所を教えてくれるんだよ。邪魔にならないように、他のことをしていてもいいんだ。思ったより、ずっと“ふつう”の所だったよ」

彼は、安心して学べる環境で、自分で計画をたてて勉強し、私立の大学附属高校に入学しました。のんびりした高校で、勉強のプレッシャーが少なく、文化祭や修学旅行も初めて経験し、心許せる友人もできました。

この春から大学生になり、周りから「おまえやさしいな」と好かれるようで、交友関係も広がり遊んでばかりで、ちょっと困っています。

彼は不登校になったことで、“ふつう”から外れて楽ではなかったけれど、やさしいまんま育ち、自分のペースで学んでくれて、人に好かれて、これはこれでよかった、一つの生き方だったと、今となっては思います。



田中 富代 氏 プロフィール

主婦、リズム講師。
東京学芸大学の運動スポーツ科学科で、キャンプ指導法を学ぶ。代々木公園の自主保育で二人の息子たちを育てる。最近、リズムあそびの指導や、小さい子と親のピクニックなどを企画。
長男、雑学とお笑い好きの20歳。
次男、バスケットボールとおしゃれ大好き18歳。

「不登校」と呼ばれる子どもは誰一人いない

木村泰子

大空小を卒業してからの3年間で47都道府県の学校現場を学ばせていただく機会をいただきました。

「みんなの学校」の上映も3年間が終わったにもかかわらず、全国での上映会が後を絶ちません。この間に様々な場での講演会やセミナーで必ずと言っていいくらい「不登校」と呼ばれている子どもや保護者の方に出会ってきました。そんな時、「学校に行けていない子どもは100パーセント悪くない」と、言い続けてきました。

「不登校」と呼ばれる子どもは誰一人存在しません。

「不登校」とは、どれだけ上から目線の表現なのでしょう。学校に行きたくない子どもなんて誰一人いません。子どもは子ども同士の関係性の中で遊んだり、語り合ったり、トラブルを起こしてやり直しをしたりしながら大人になっていくのです。

学校に行きたくても行けない子どもをつくっているのは学校だと思わざるを得ない状況が至る所にあるのです。その他大勢の子どもを「普通の子」と呼び、「普通の子」を入れるスーツケースに入らない子どもを「不登校」と呼んでいる現実が、残念なことですが、どれだけあるかしれません。

「みんなの学校」の9年間に、多くの「不登校」と呼ばれている子どもが転校してきました。その子どもたちが「みんなの学校」には何事もなかったように登校するのです。前の学校には行けなくて「みんなの学校」には来るといふその違いは何な

のかをその子どもたちからいつも教えてもらっていました。そのほとんどの子どもが口にする言葉は同じでした。何が違うのかの問いに「空気」と答えるのです。「空気」がどう違うのかを問うと、これも多くの子どもが前の学校の空気は「牢屋」とか「監獄」とか「刑務所」と答えるのです。これには驚くと同時に、子どもはそう感じていたのだということを改めて突きつけられました。

「牢屋」となぜ思うのかの問いには、ほとんどの子どもが次のように語りました。

- 牢屋にはオリがあって鉄の策があり、外に出ることができない
- 中で動いたら「動くな」と怒鳴られる
- 中で思ったことを言ったら黙れと叱られる

教師は指導しているつもりでも、子どもにとっては「牢屋」から出ることができない恐怖と苦しみを背負わされていたのです。

そこで、「みんなの学校」の空気はどんな空気なのかの問いには、「普通」と答えました。

教師や保護者は、なぜ学校に来れないのかと子どもに聞きませんが、自分が安心して吸える空気がないことを子どもがどんな言葉で説明できるでしょうか。なぜ行けないのかではなく、どうしたら安心して行けるかを「困っている子」の周りの子どもや大人が常に想像し自分の事として考えていくことで、学校の

「空気」は変わっていきます。自分が安心して吸える「空気」があれば、「普通」に学校に行くことができます。

「困っている子」が困らなくなる学びの場は、周りの子どもも育ちます。すべての子どもが豊かに学び合える場になるのです。「不登校」と呼ばれる子どもを生まないように、気づいた大人が人に求める前にまずは自分が動くことを大事にしたいです。



木村泰子 氏 プロフィール

大阪市立大空小学校初代校長。大阪市出身。武庫川学院女子教育学部短期大学保健体育学科（現武庫川女子大学短期大学部健康・スポーツ学科）卒業。

「みんながつくる みんなの学校」を合言葉に、子ども、保護者、地域住民、教職員一人ひとりがつくる大阪市立大空小学校の初代校長を9年間務めた。「すべての子どもの学習権を保障する学校」として、ドキュメンタリー

映画「みんなの学校」が話題となった。2015年春、45年間の教職歴をもって退職。現在は全国各地での講演活動、教員研修、執筆などで多忙な日々を送る。著書に『「みんなの学校」が教えてくれたこと』（小学館）『不登校ゼロ、モンスターペアレンツゼロの小学校が育てる 21世紀を生きる力』（水王舎）などがある。

INFORMATION

★NPO 法人自由創造ラボたんぽぽ…不登校の総合サポート

神奈川県藤沢市で、不登校相談、子どものフリースペース、親の会などを運営。講演会や講座など、不登校への理解啓発活動も積極的に行い、誰もが自分らしい教育を受けられる社会づくりを目指して活動中。 連絡先 : labotanpopo@gmail.com

★おはなしワクチン

「学校に行かなくていい」「学校以外の学びの場はいっぱいある」この二つの事実を保護者が知ってさえいれば、不登校の悩みはたちまち解消。この事実をひとりでも多くの保護者にお伝えしていくことが「おはなしワクチン」の活動です。

不登校は決してネガティブなものではありません。むしろ不登校はチャンスです。「学校の呪縛」から開放された瞬間、これまでの学校教育にしばられない、自由でのびのびとした教育のチャンスがめぐってくるのです。まるで水中から顔を出したときのように、楽な気持ちになれるのです。

そう、子どもの不登校は人生最大のチャンス！

「不登校」という言葉がなくなる日を目指して、みなさんと一緒に進んでいきたいと思えます。

URL : <https://ohanashivaccine.wordpress.com/>

★ZOOM 版 教育と子育てを語り合うお父さんの会

お父さんも子育てや教育の悩みや体験を語りませんか？

毎月第3水曜日 21:30より Zoom という通信アプリを使って開催しています。 URL : <https://bit.ly/2lpdvlt>